神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	初期狩野派の北野天神縁起絵巻（上）
著者	相澤正彦
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 24 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1998 年（平成 10 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

北野天神縁起絵巻　全六巻

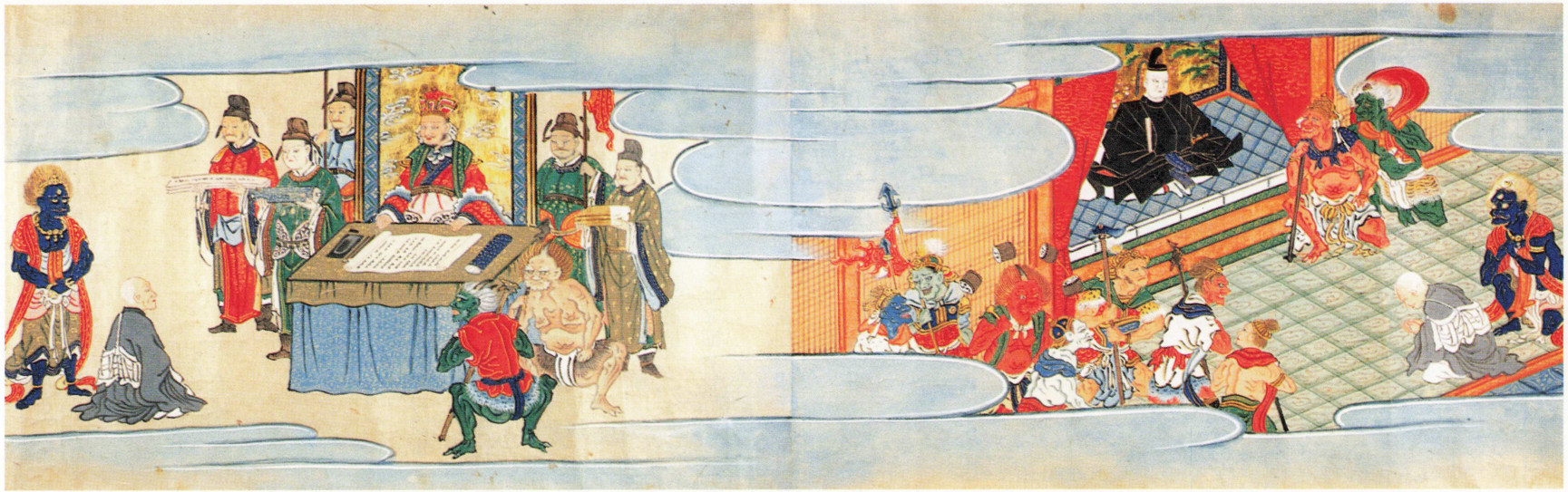
神奈川県立歴史博物館藏

第一巻　詞八段、絵八段（縦三一・一　横一三九二・〇）
第二巻　詞八段、絵八段（縦三一・一　横一四五三・一）
第三巻　詞九段、絵九段（縦三一・一　横一四九六・九）
第四巻　詞五段、絵五段（縦三一・一　横一一三七・八）
第五巻　詞七段、絵七段（縦三一・一　横一三三八・六）
第六巻　詞七段、絵七段（縦三一・一　横一五五三・七）

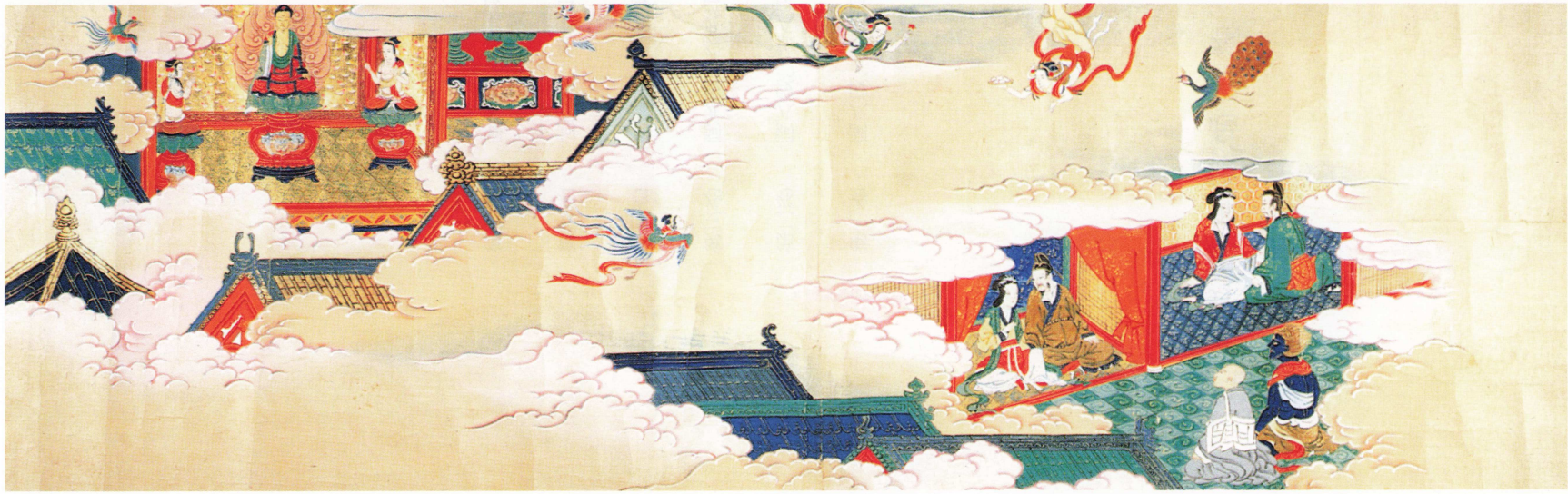
単位はセンチメートル

（1～29ページ）

第４巻第１段（部分）

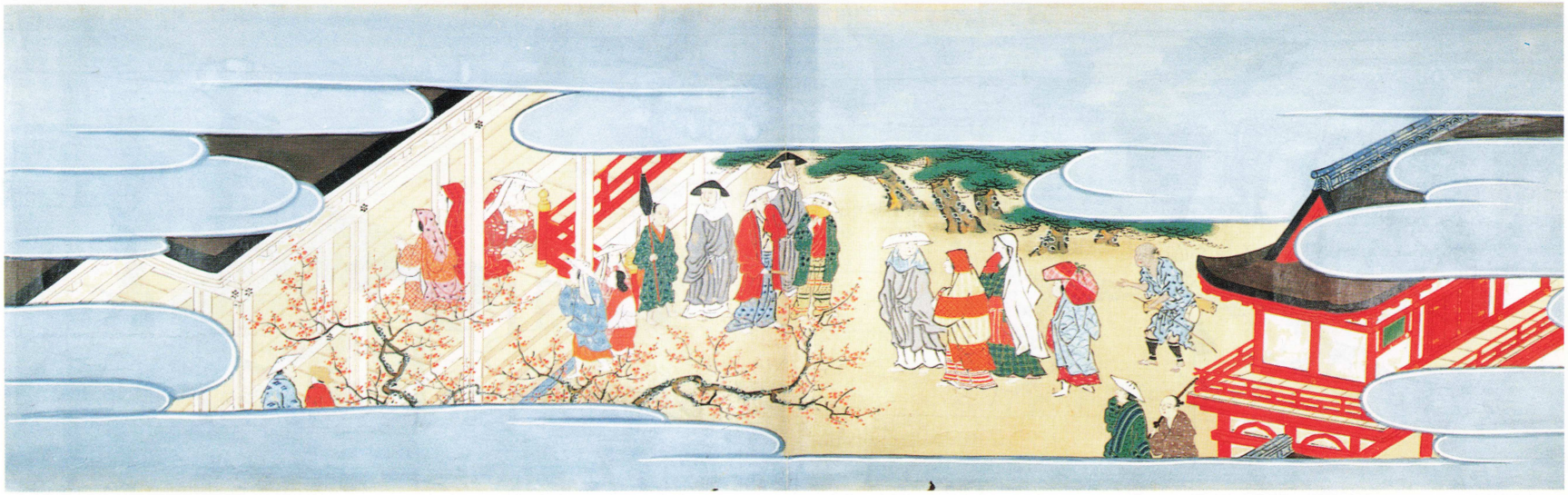


第４巻第１段（部分）

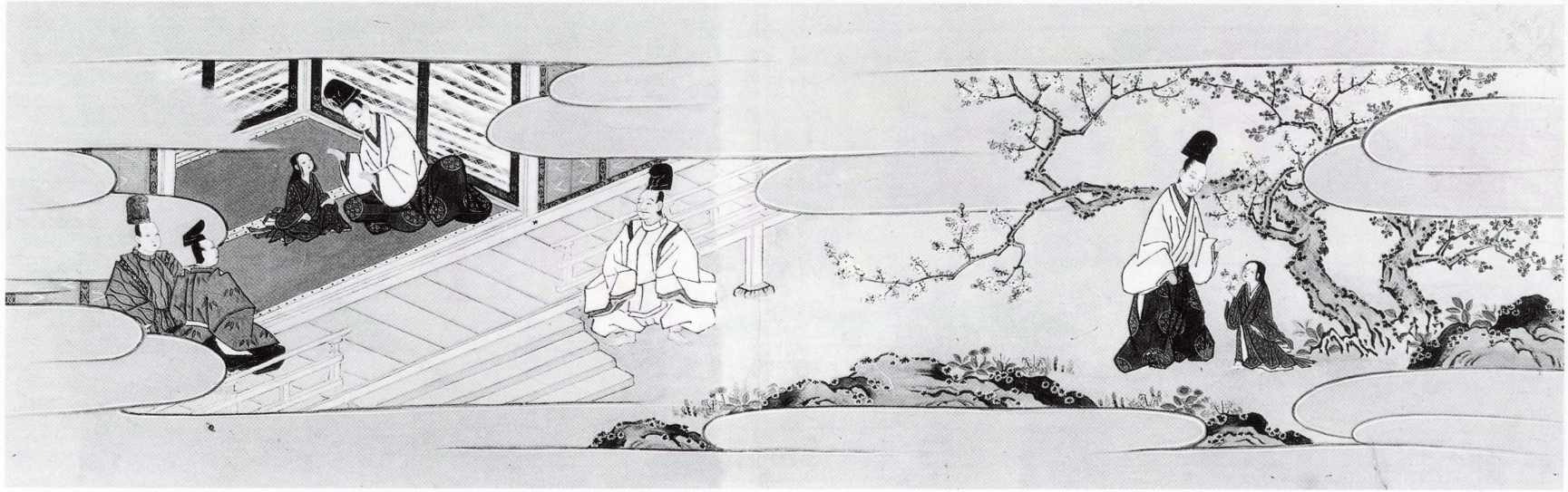


第４巻第３段（部分）

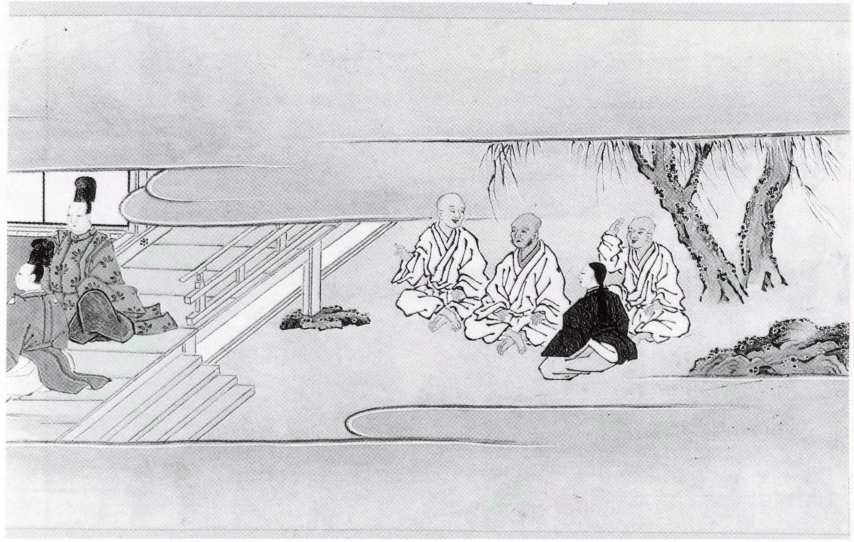
第５巻第４段



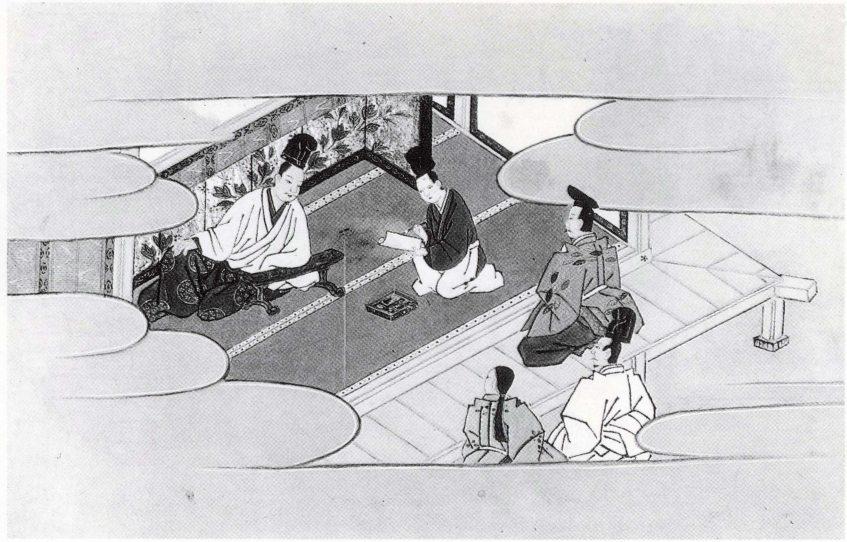
第1巻第1段（以下1－1とする）



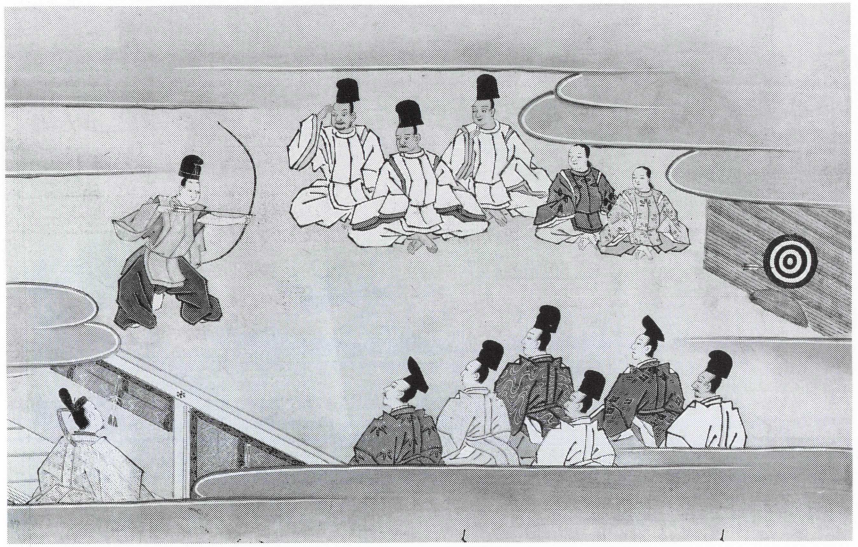
1－3

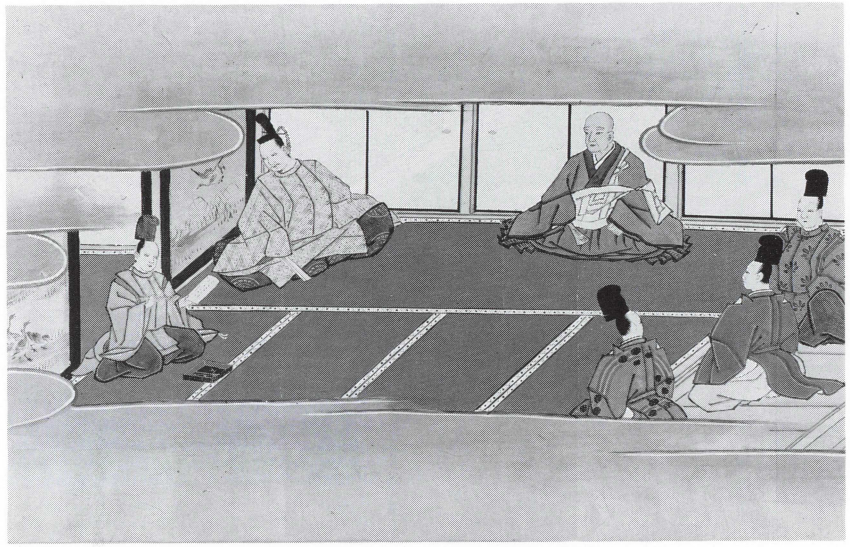


1－2

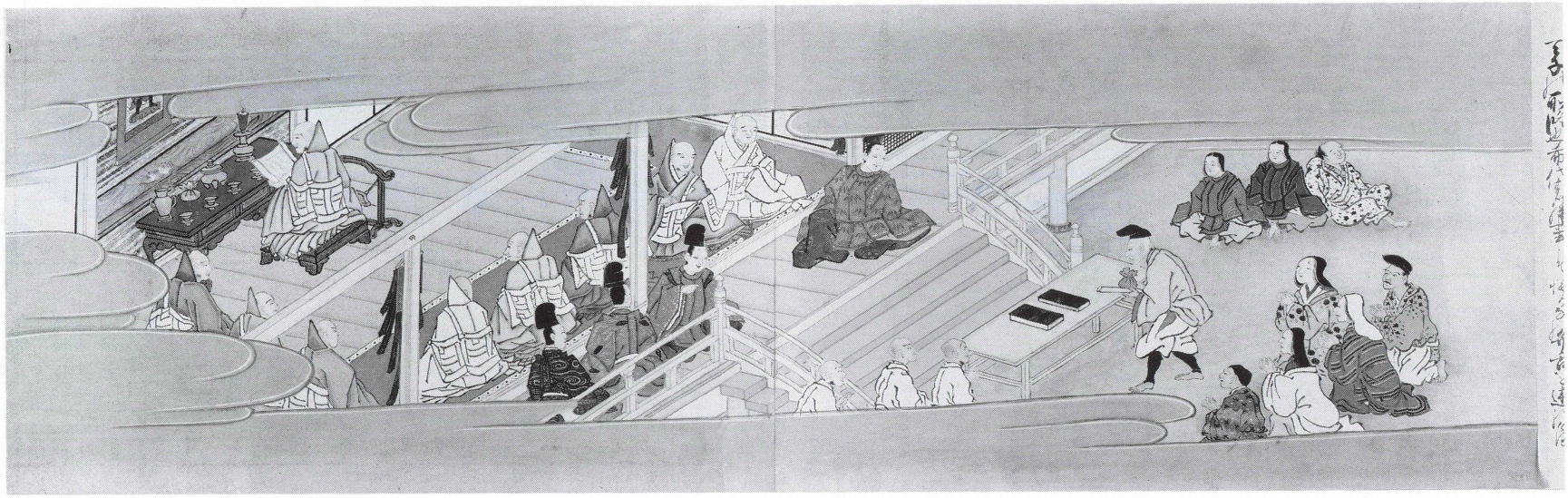


1－4

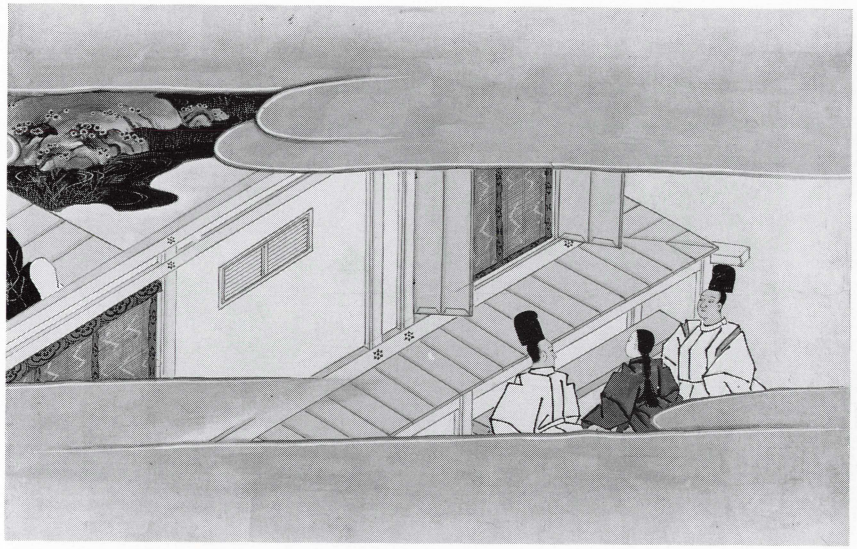




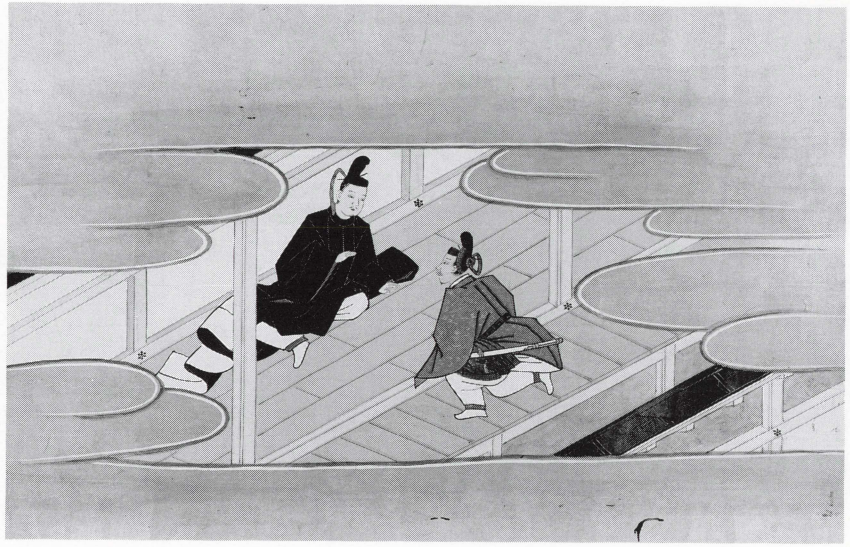
1－5



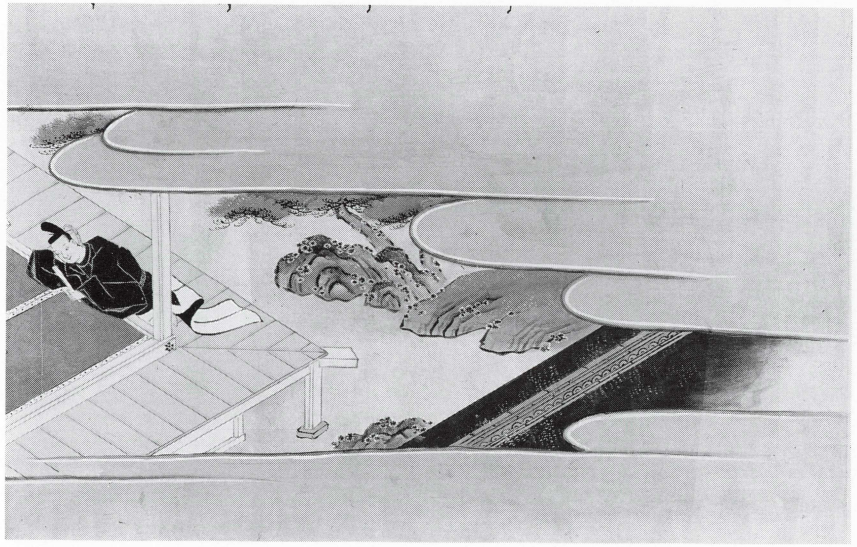
1－7

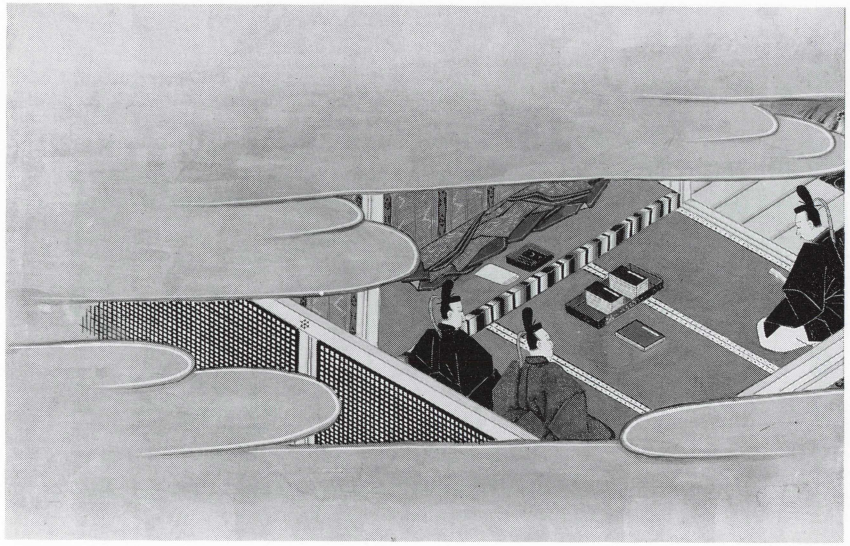


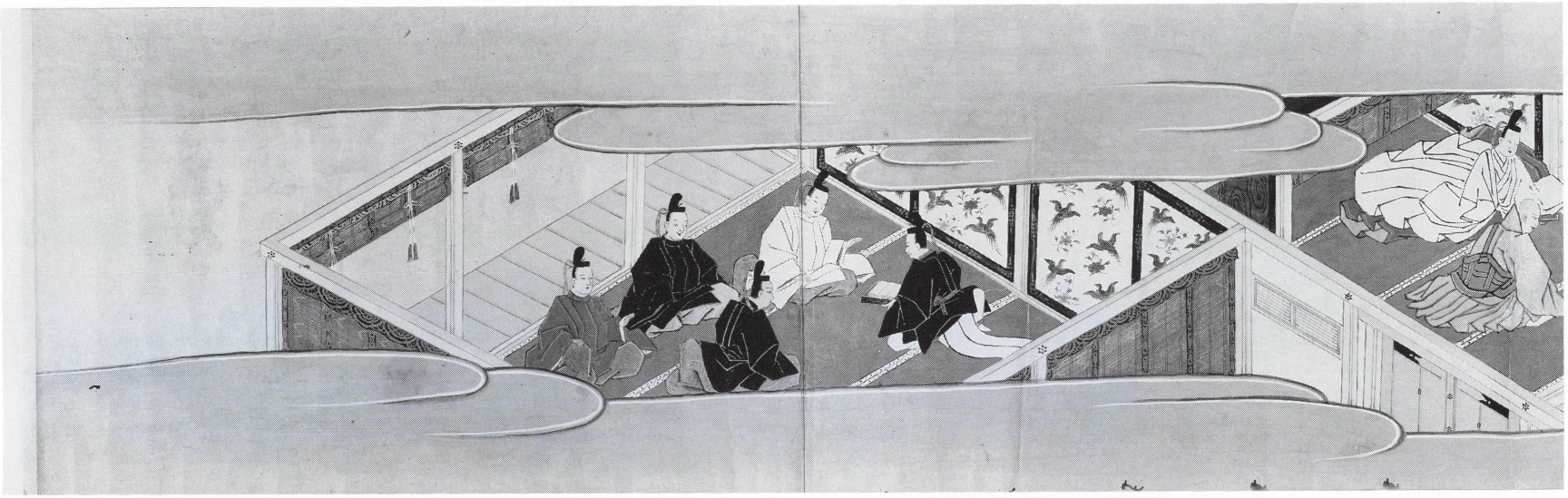
1－6



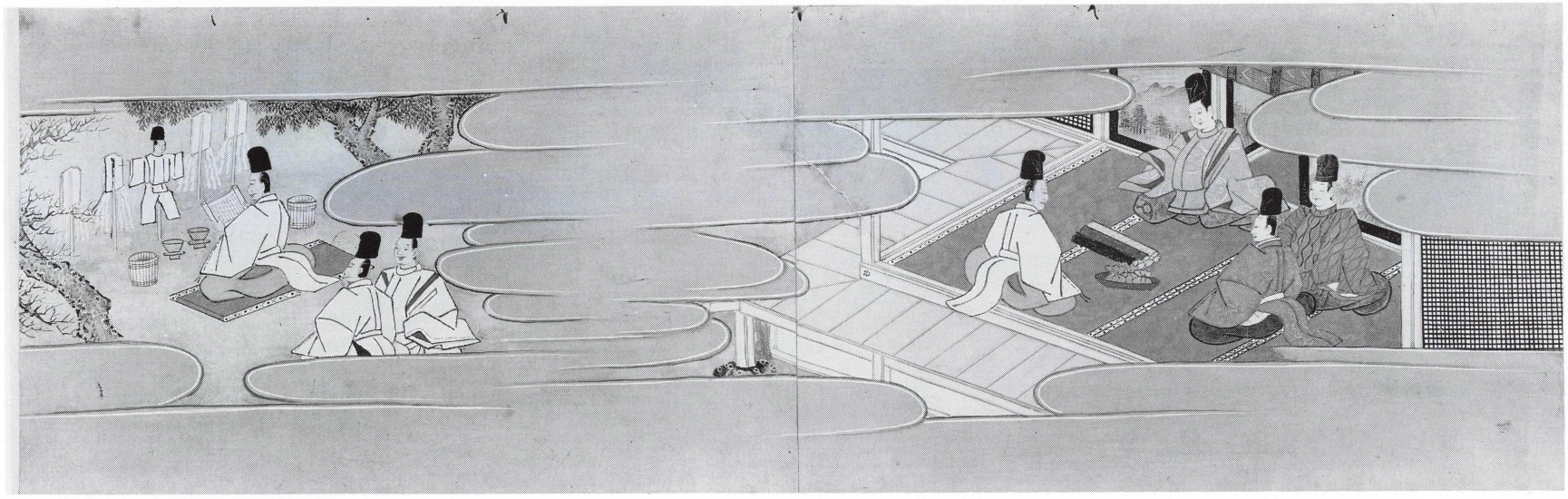
1－8



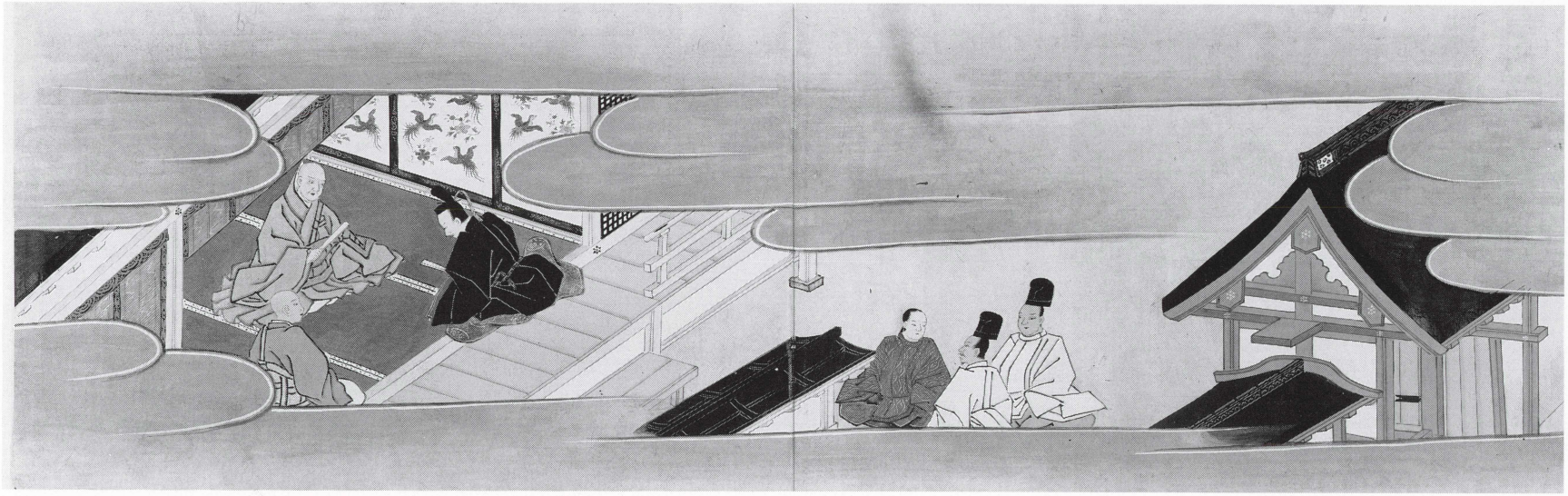




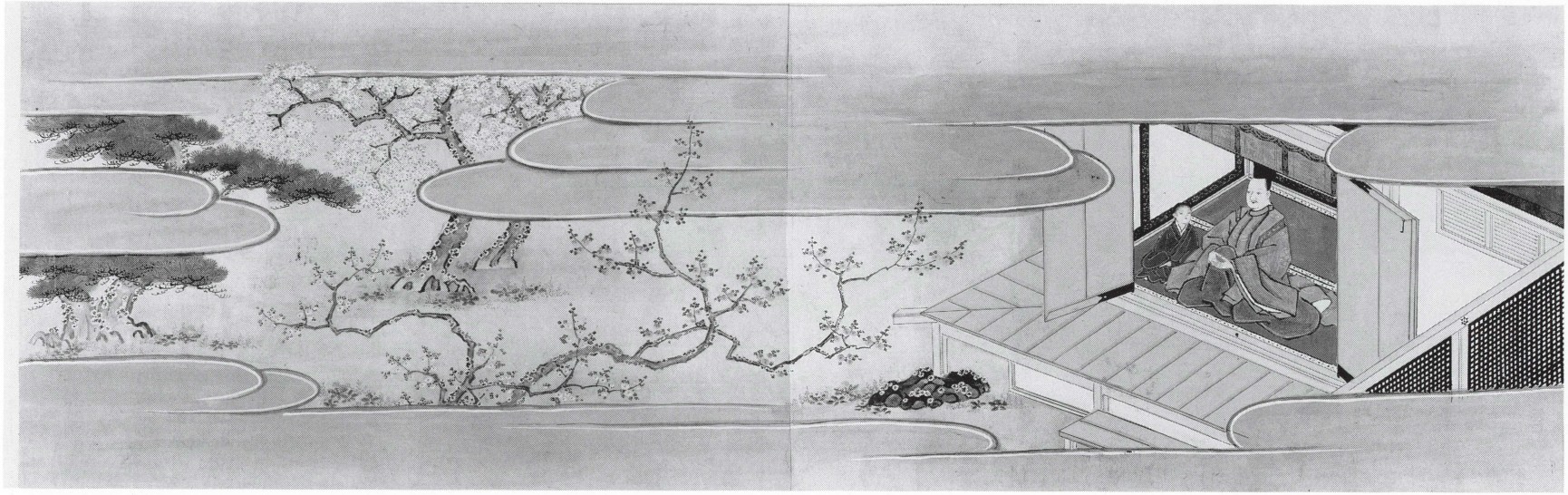
2—1



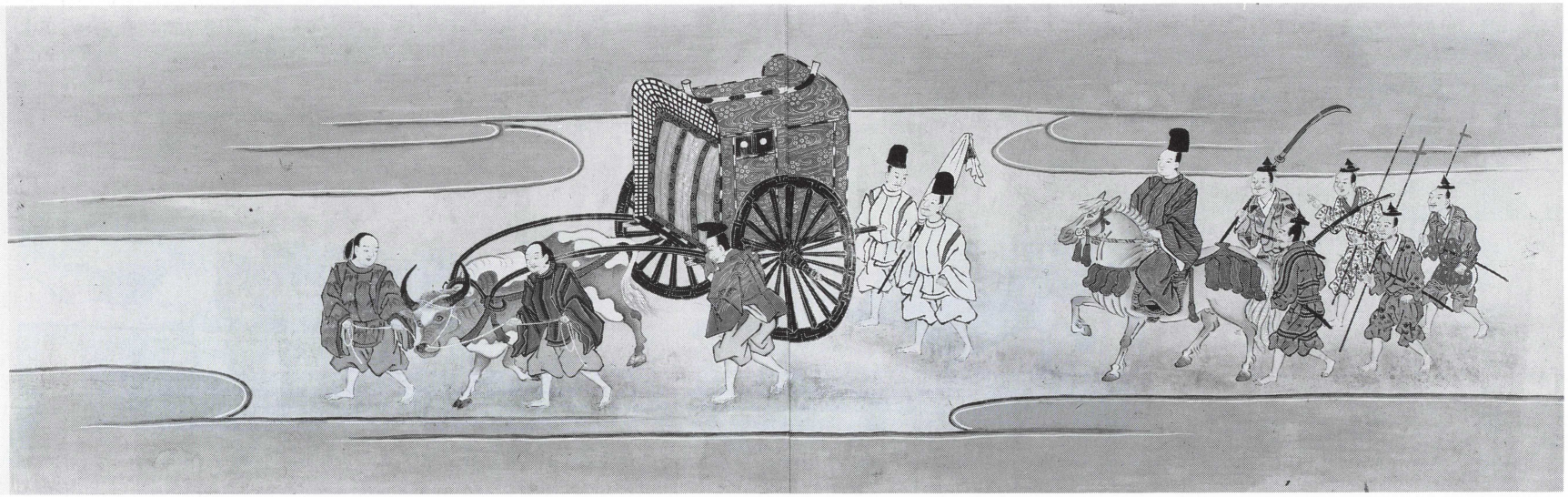
2－2



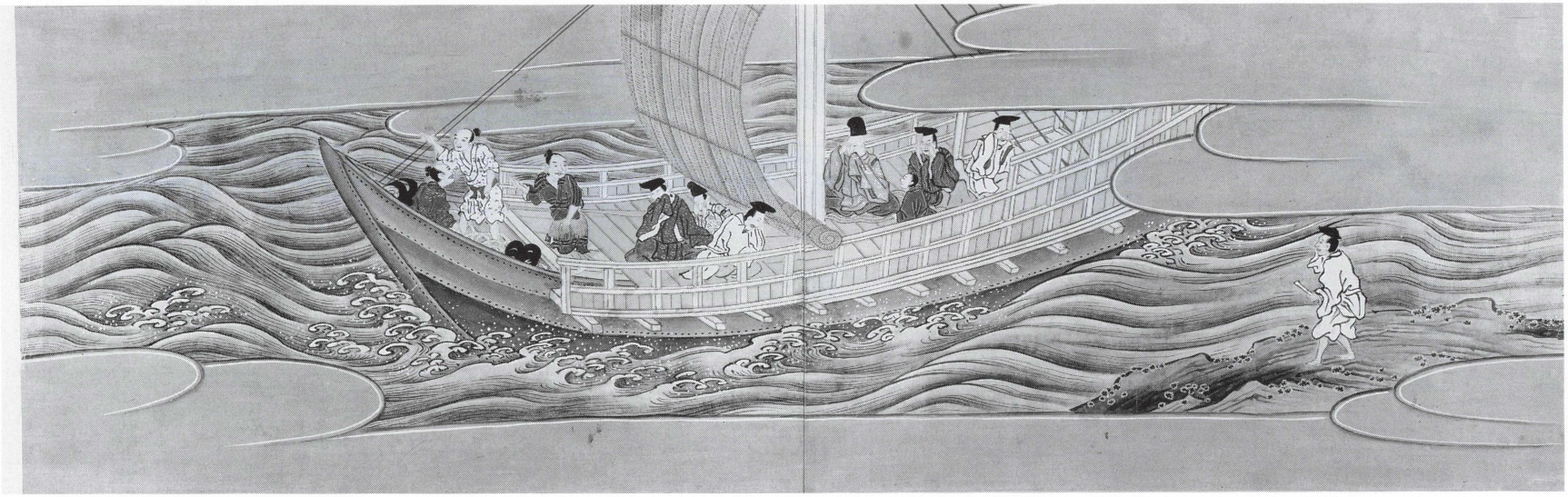
2－3



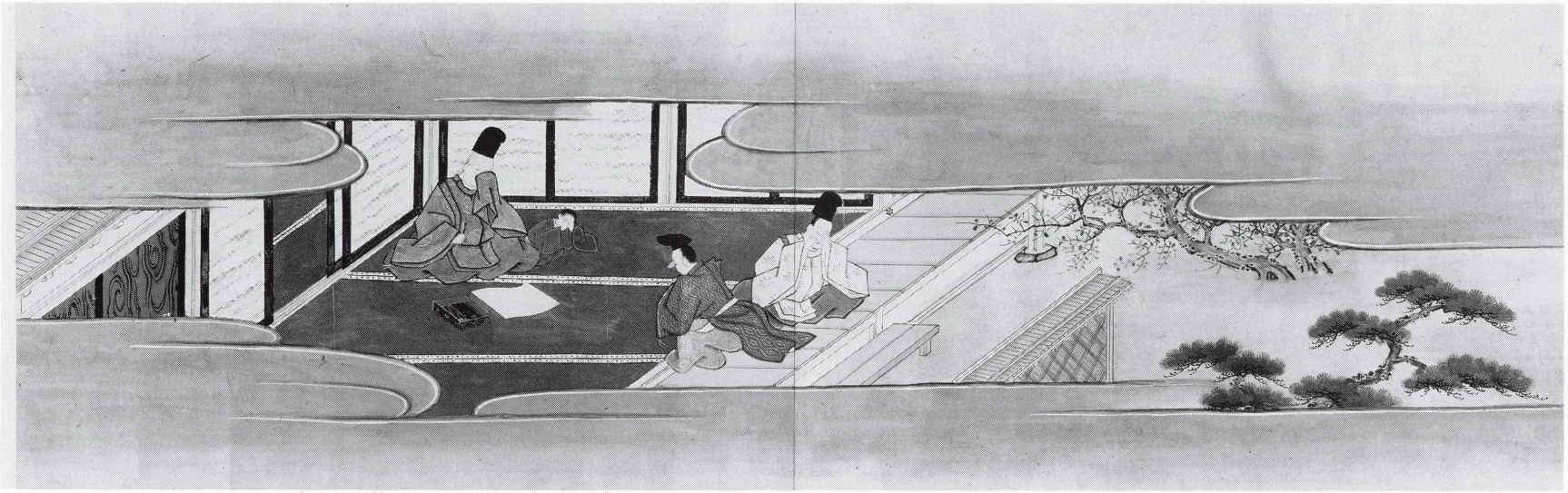
2－4



2－5

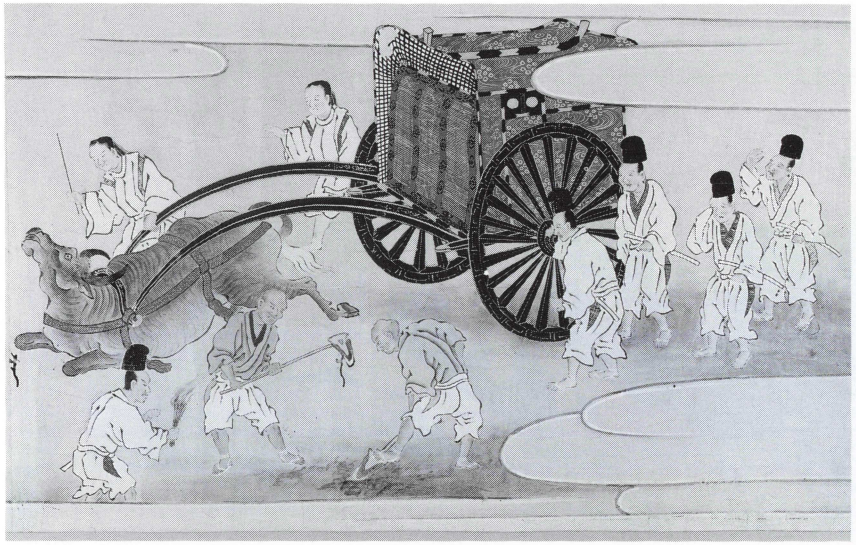


2－6

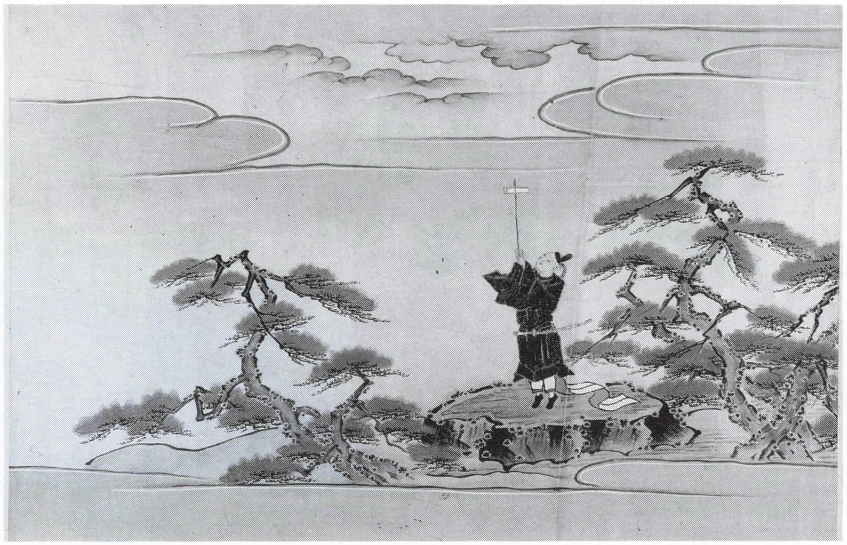


2－7

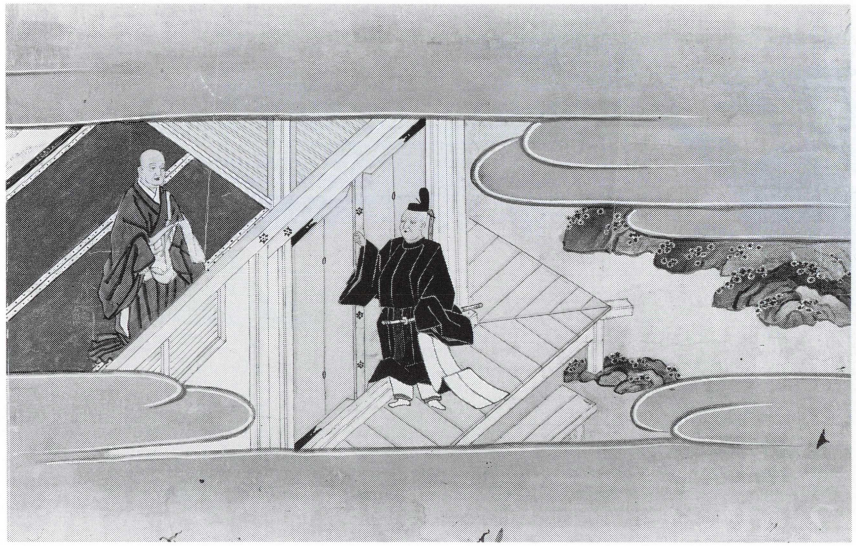
3－1

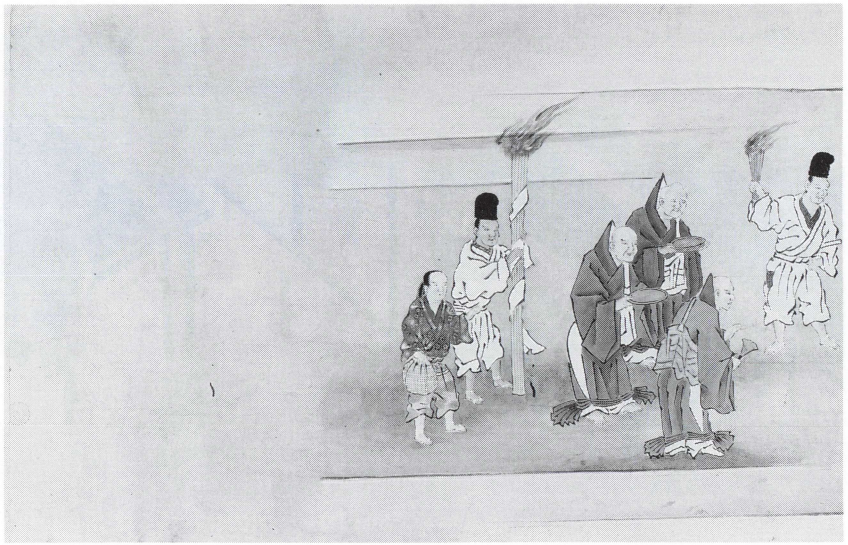


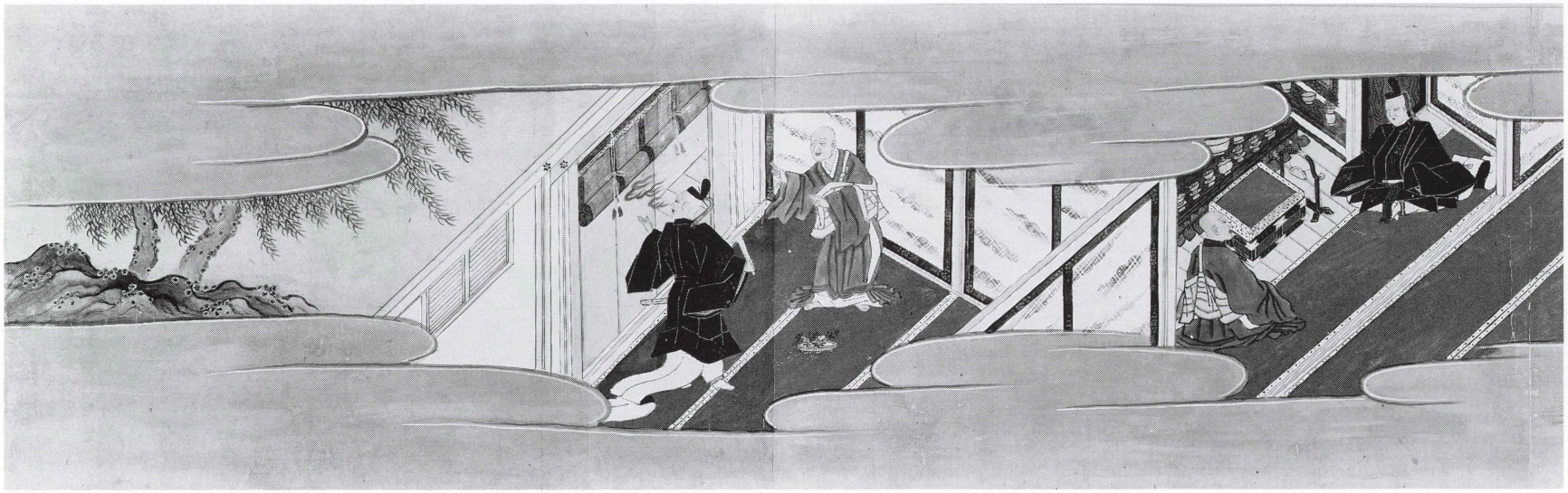
2－8



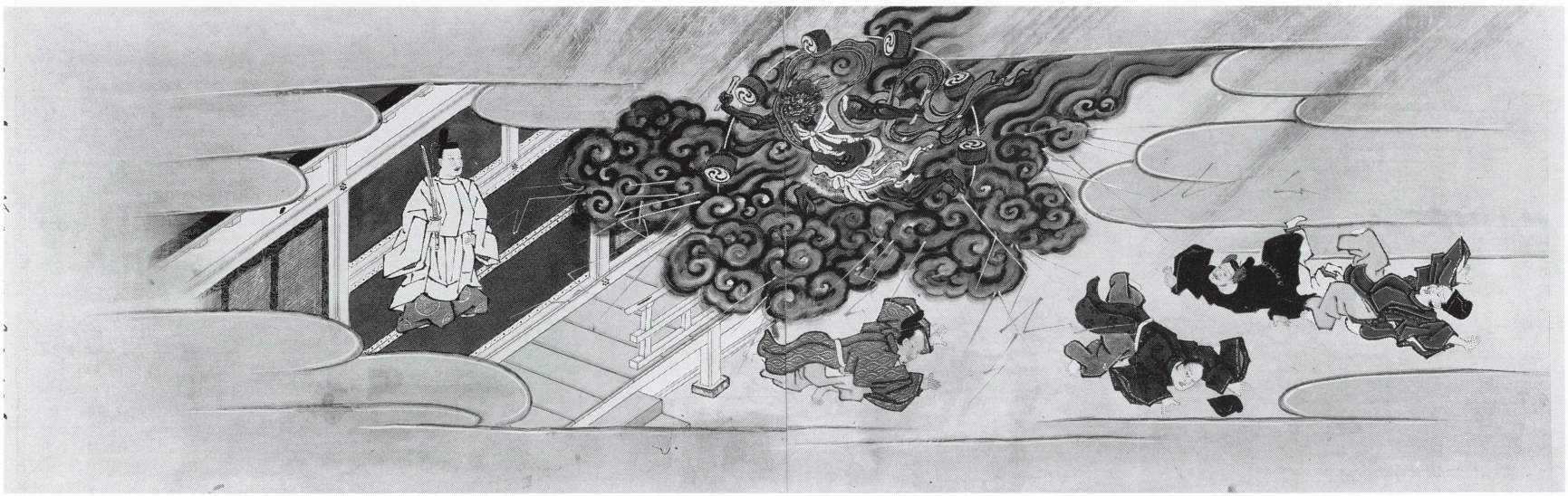
3－2





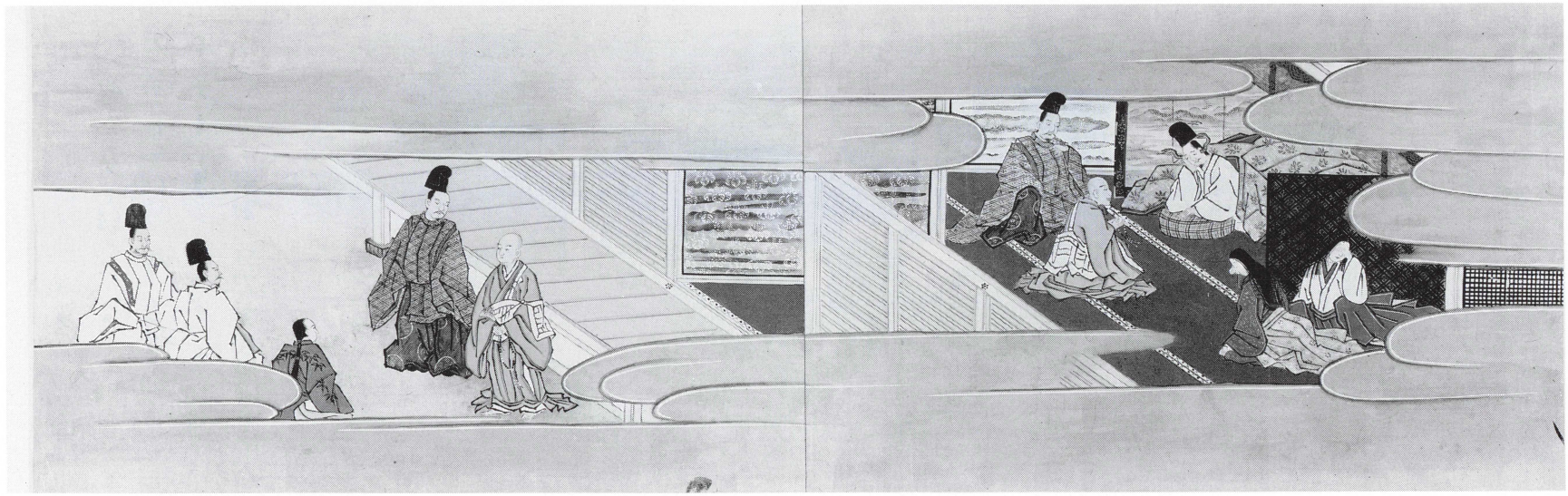


3 — 3

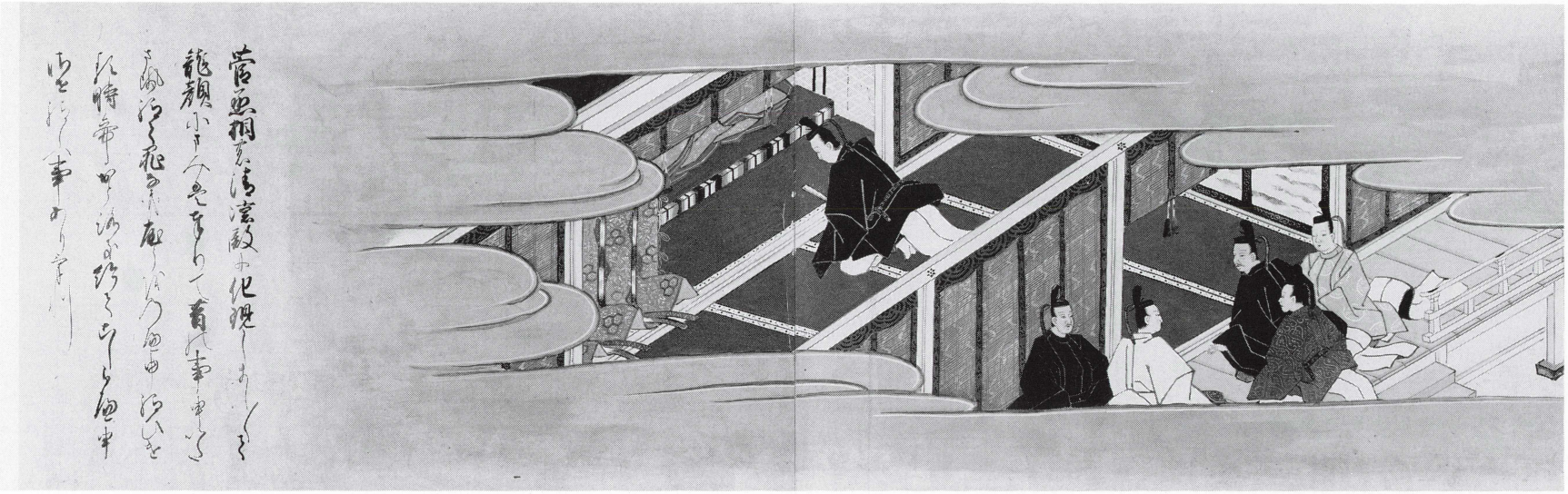


3－4

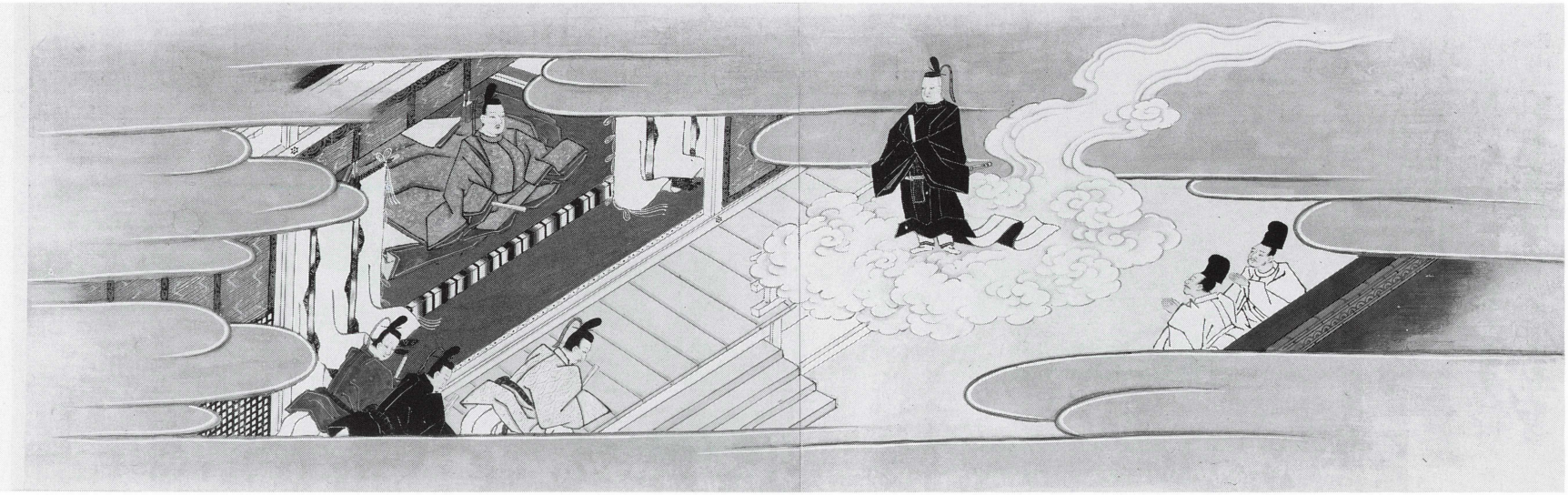
3－5



3－6

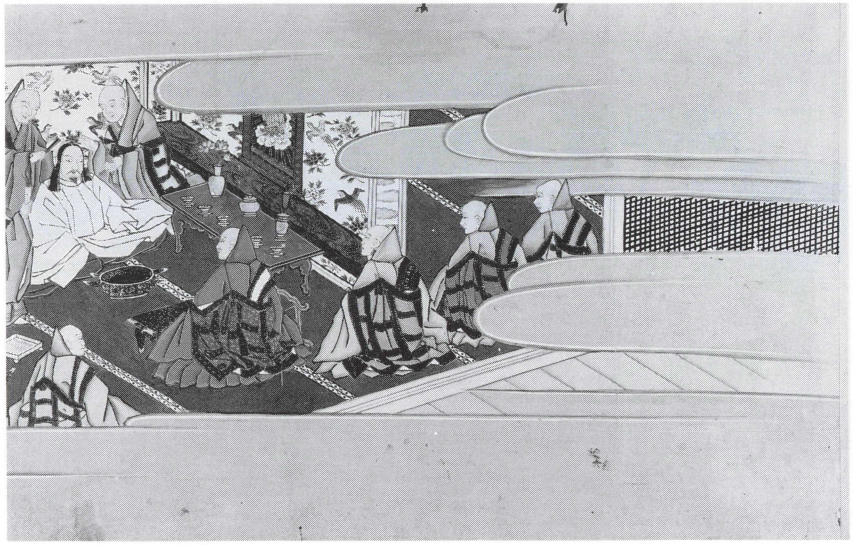


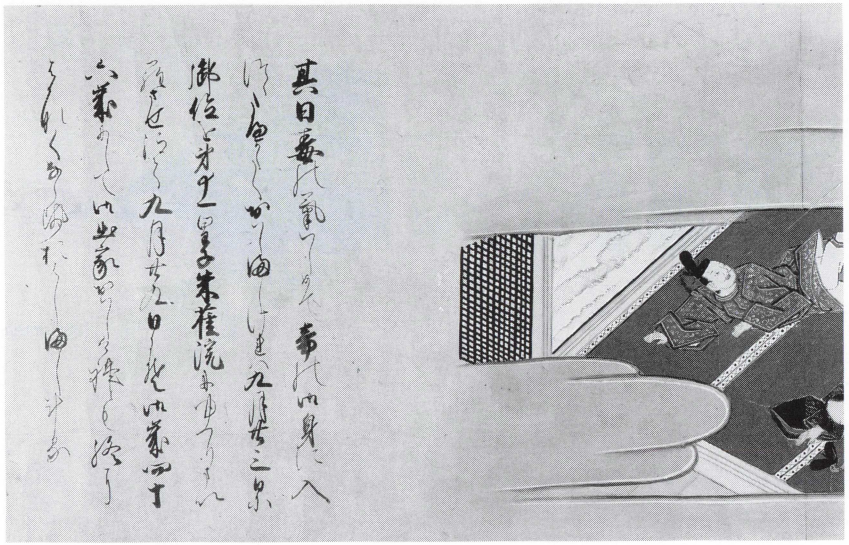
3－7

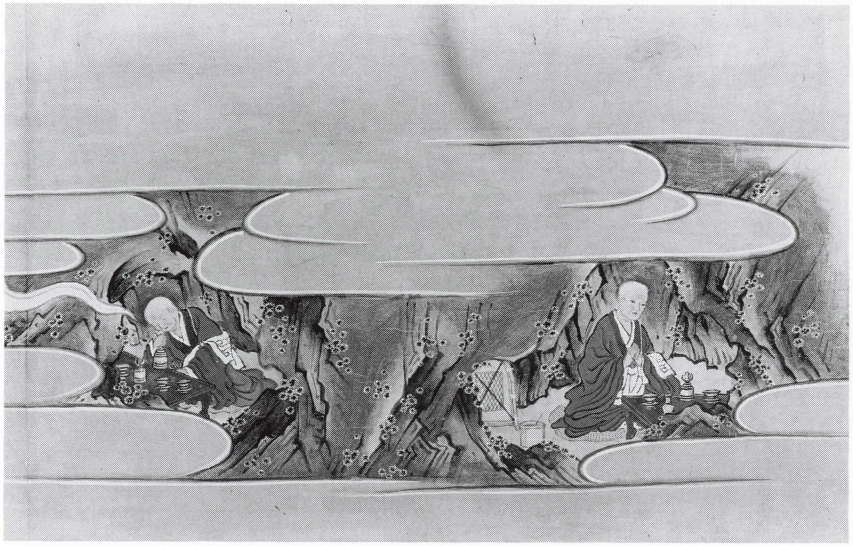


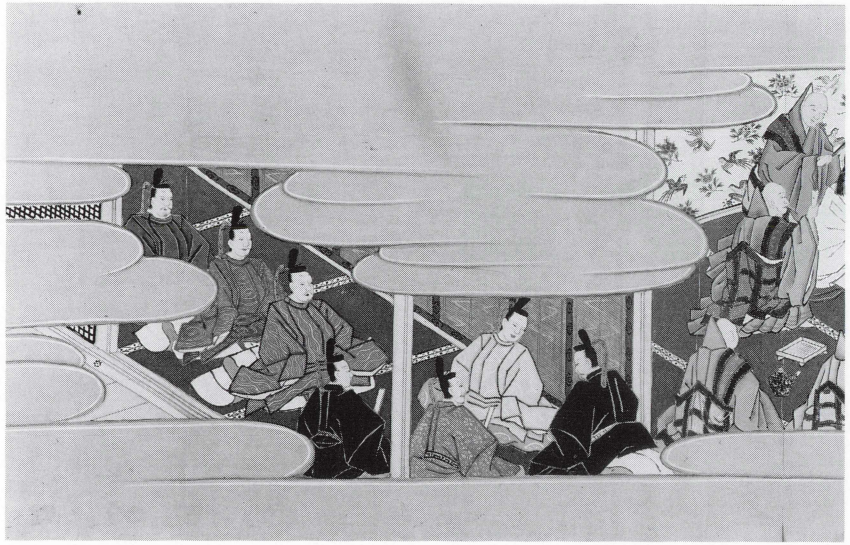
3－8

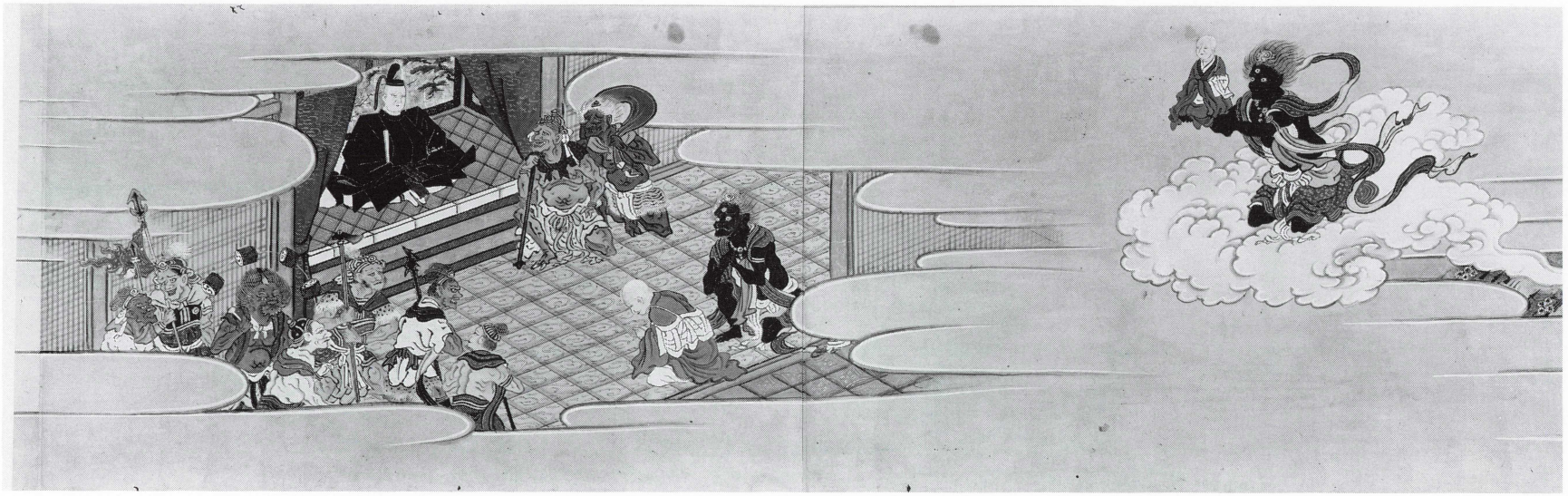
3－9

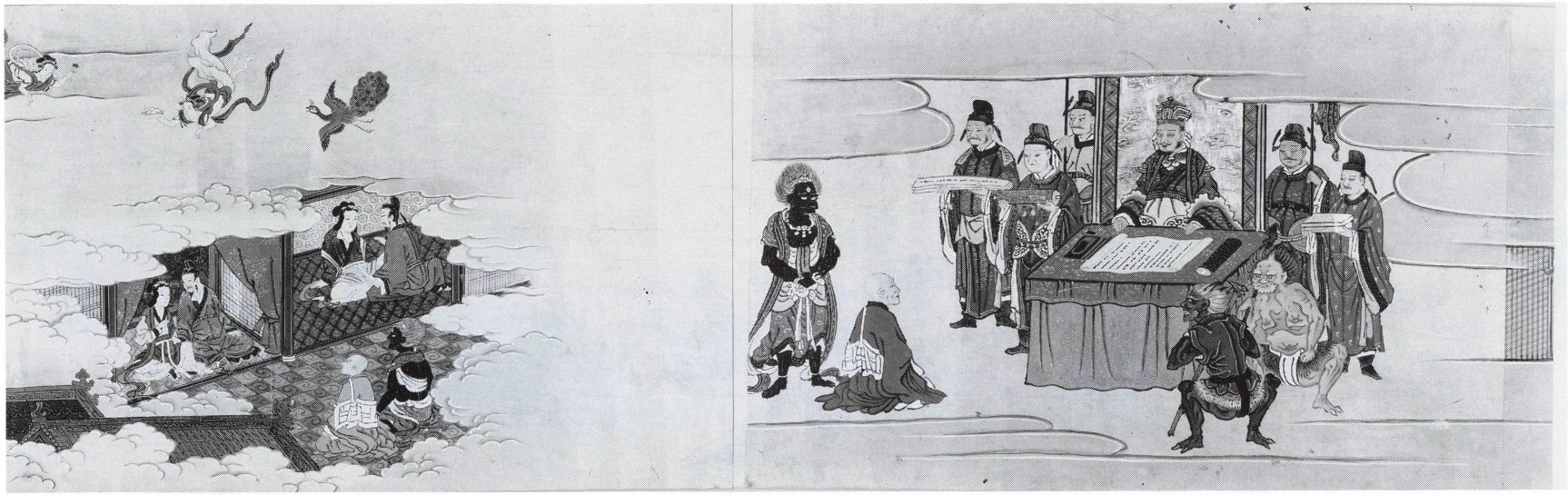




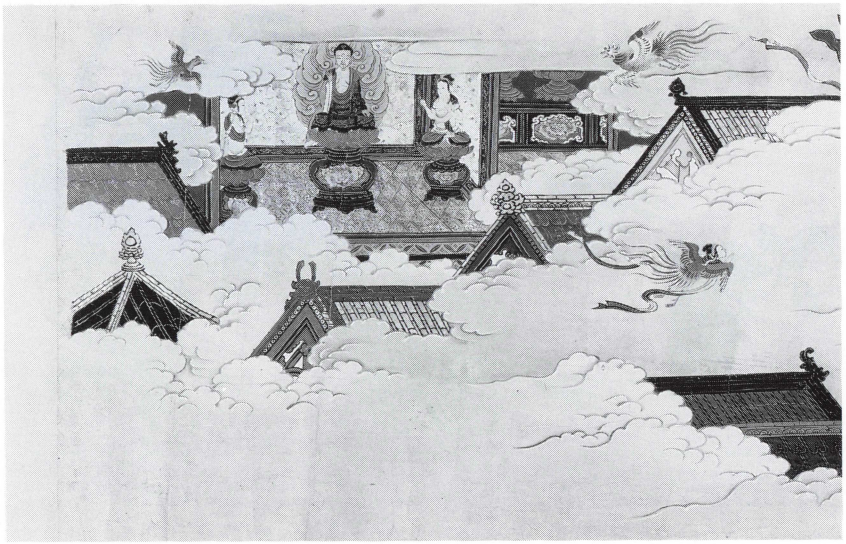




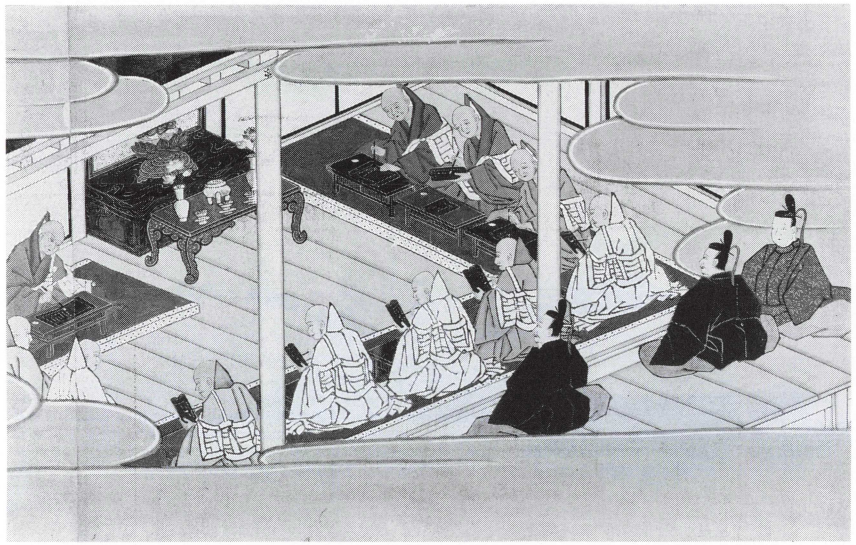




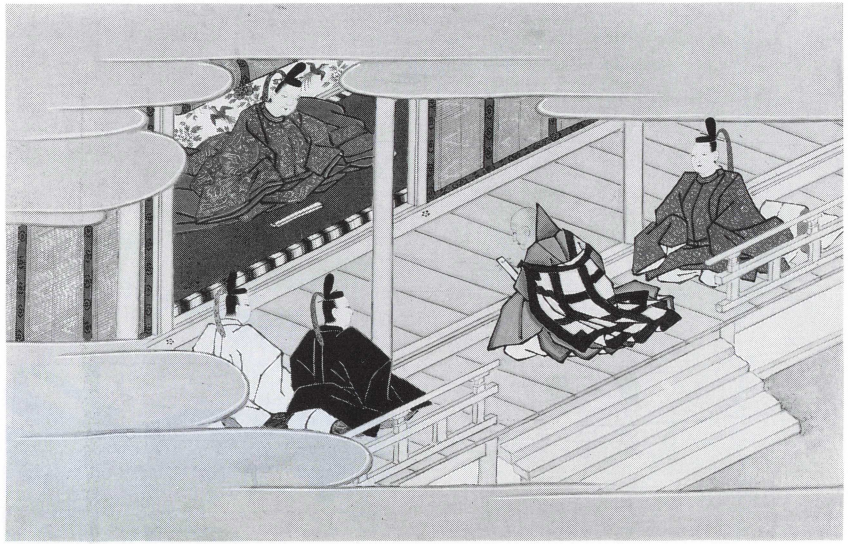
4 — 2

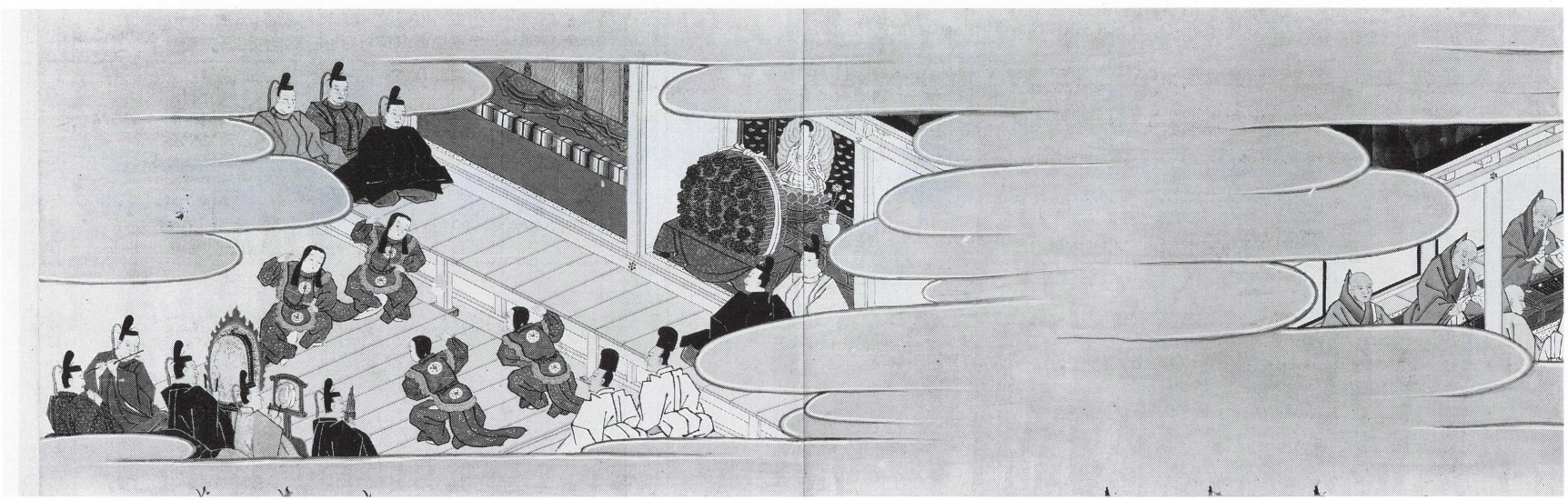


4－5

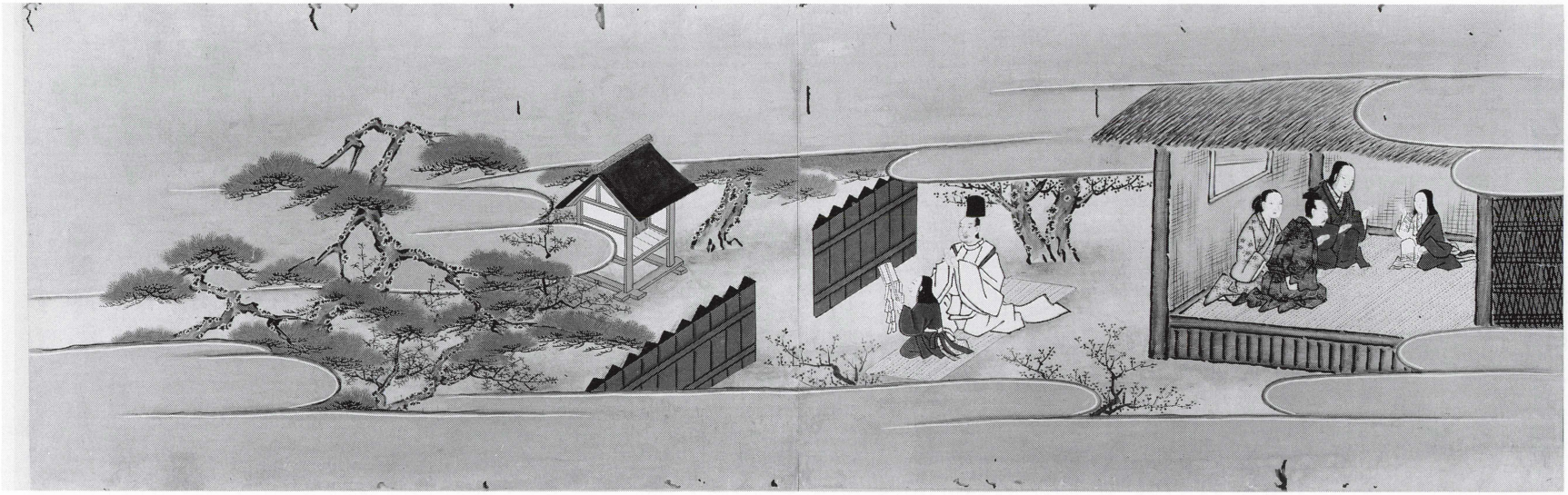


4－4





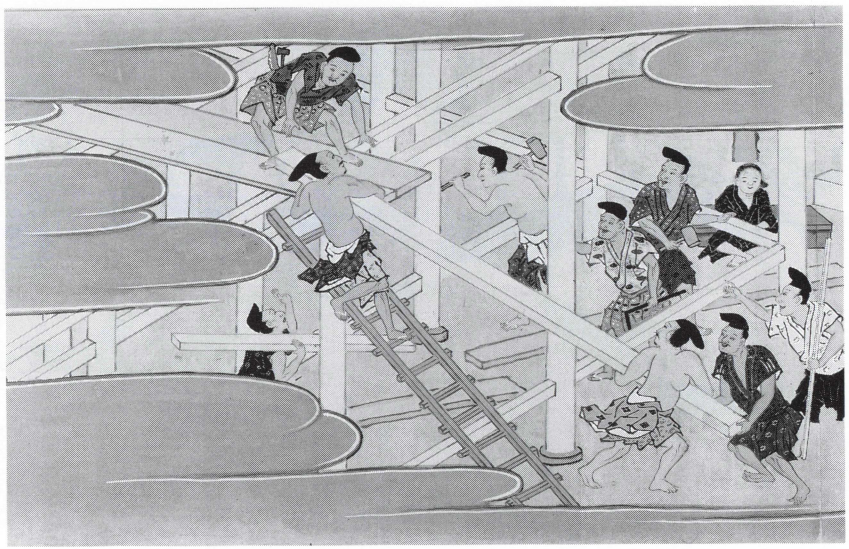
5－1



5－3

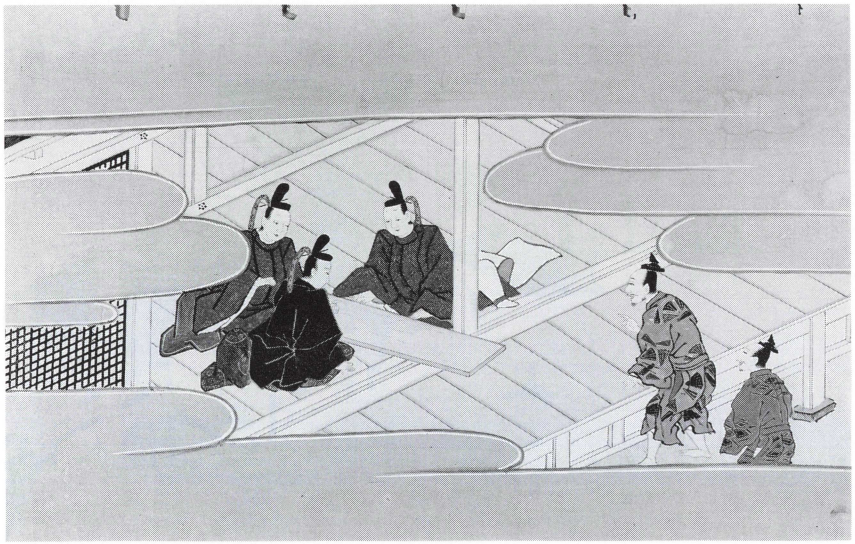
5－2

5－4



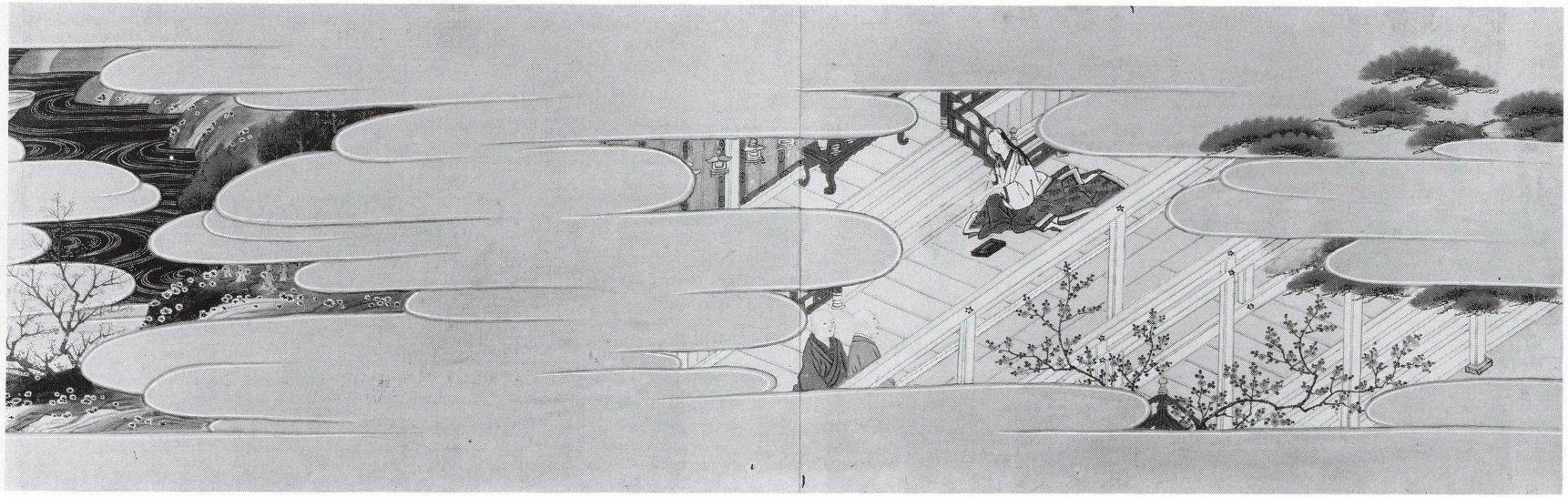
5－5

5－6

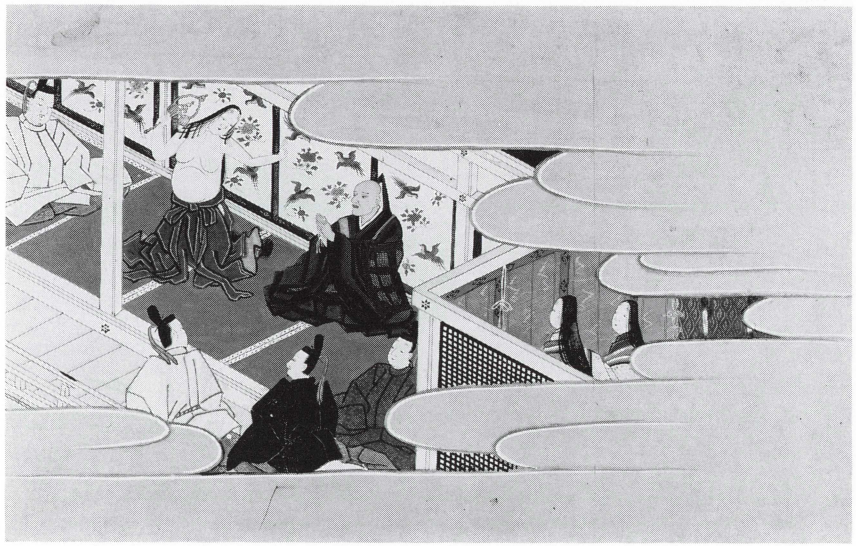


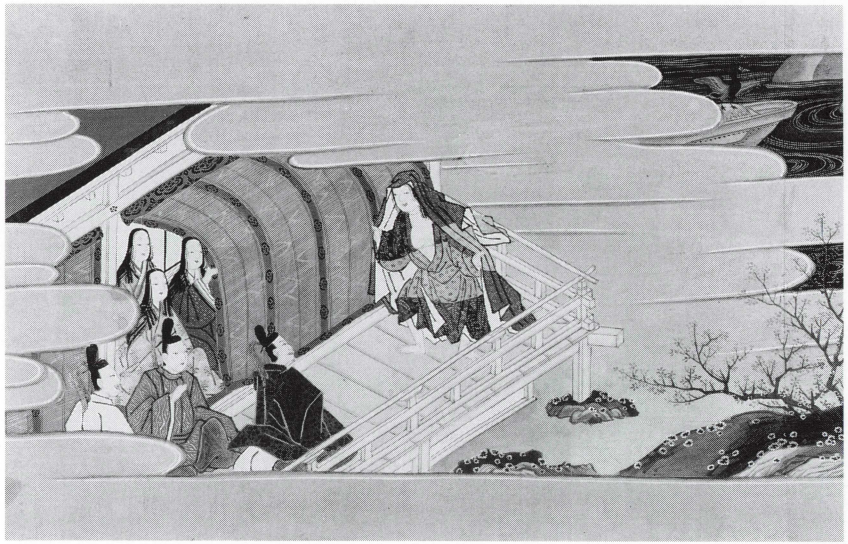
5－7

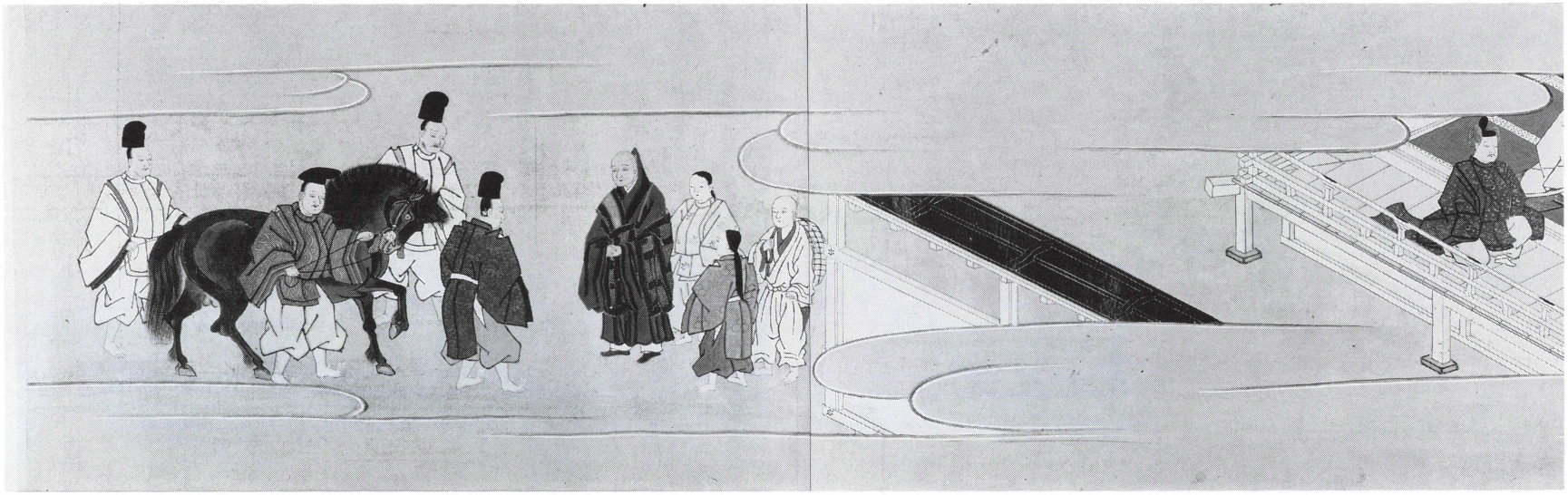
6－1



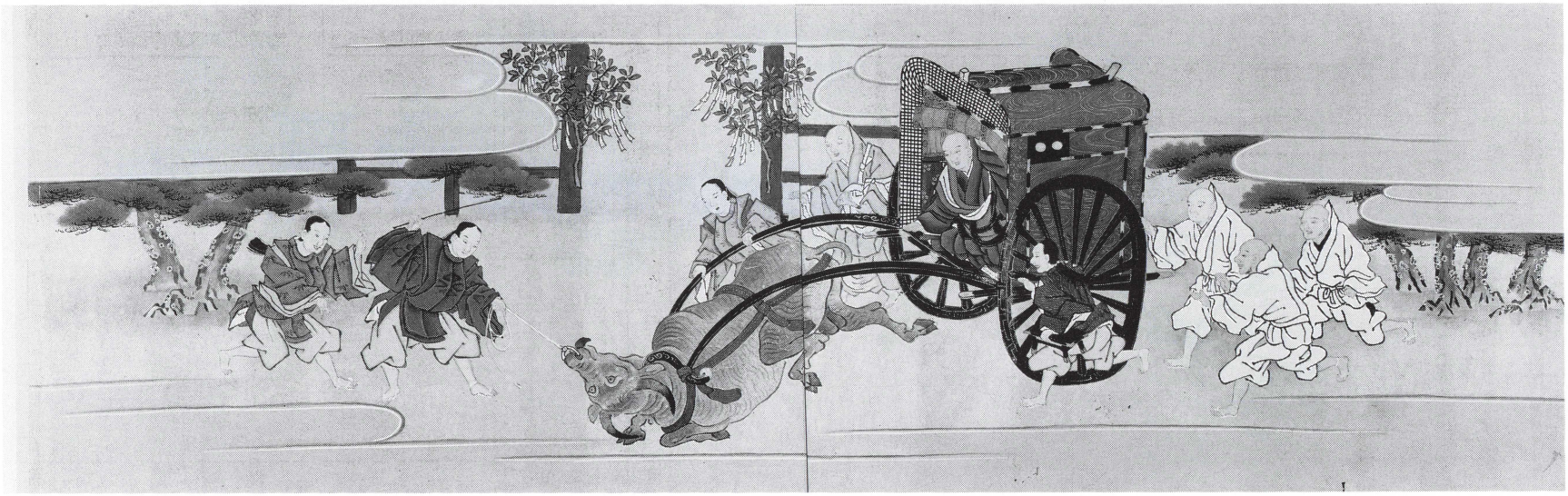
6－2



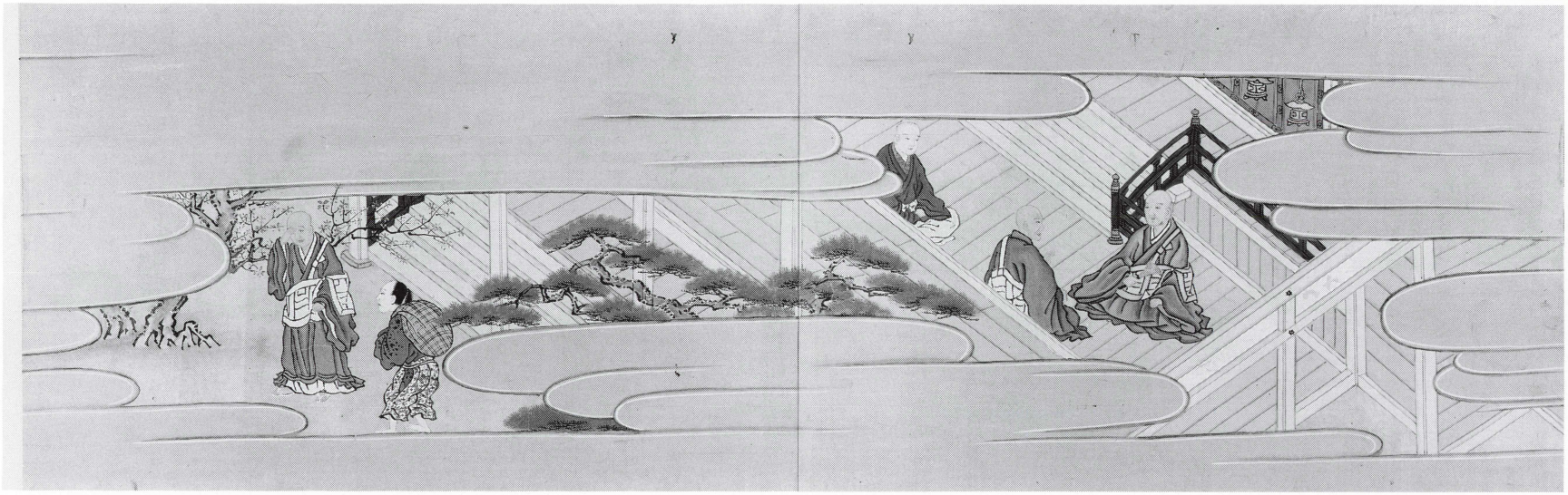




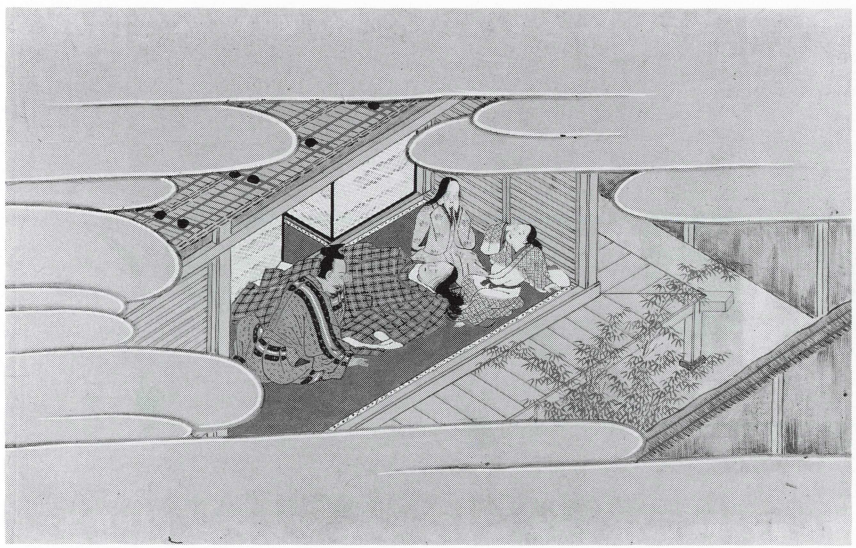
6－3

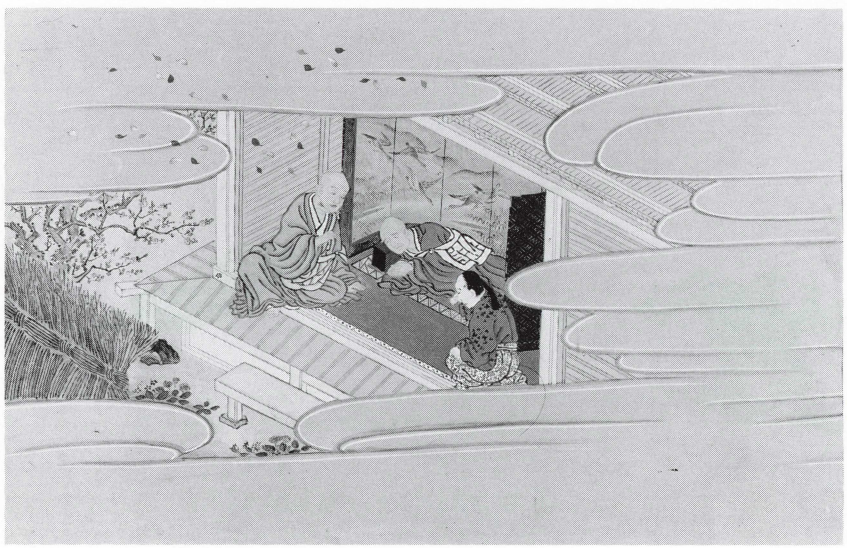


6－4

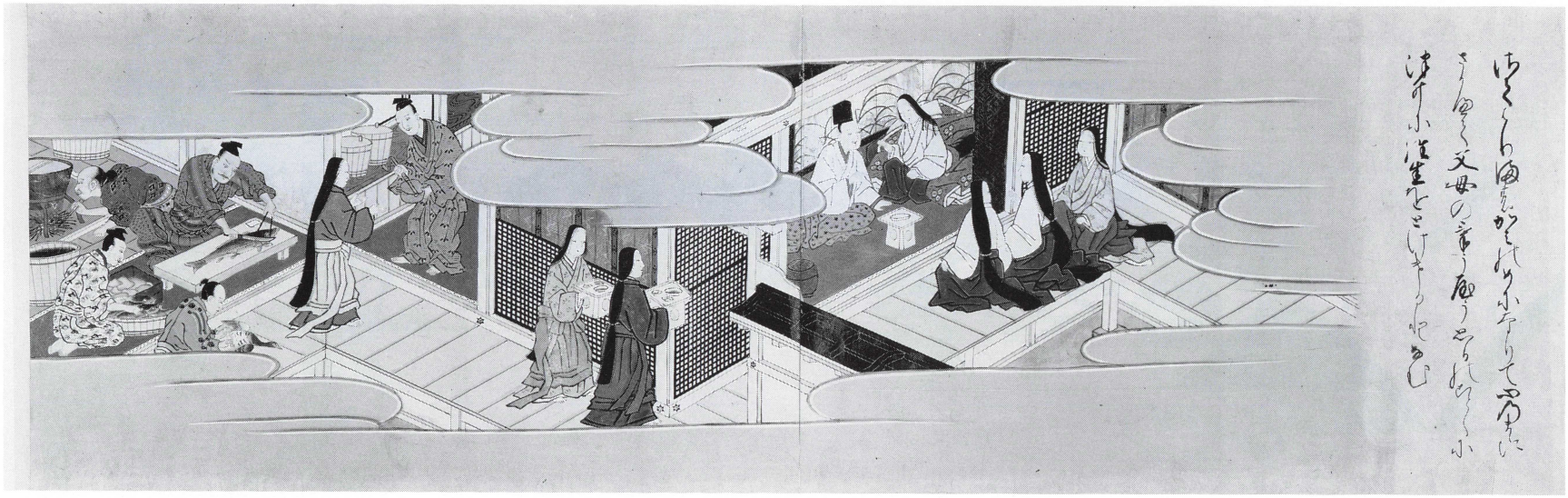


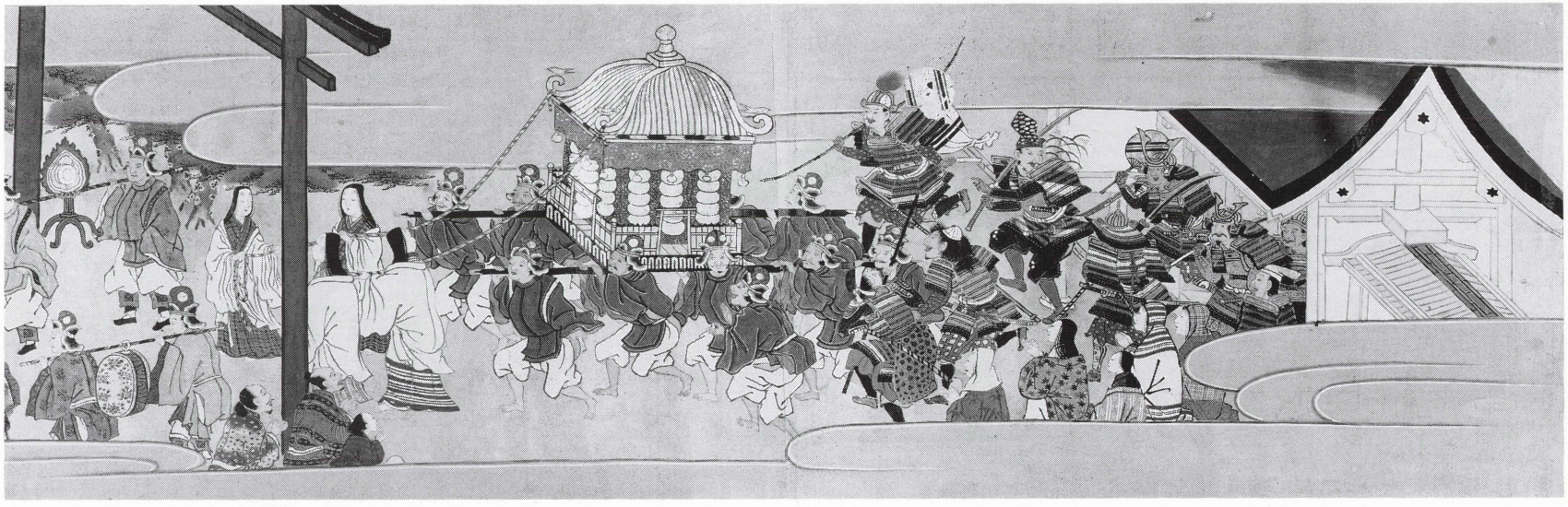
6－5





6－6





初期狩野派の北野天神縁起絵巻（上）

相澤正彦

【キーワード】　北野天神縁起絵巻　狩野派　狩野元信

【要　旨】

近年、新出した北野天神縁起絵巻（全六巻、四十四段）についての考察である。系統としては、甲本系の北野天神縁起に属し、作られた時代は室町後期、十六世紀半ばに下り、中世の天縁起絵巻の掉尾を飾るものである。本作品の最も注目すべき点は、当時の中央画壇に重きをなした狩野元信様式を持つと言うことである。そのためか、通例、この種の縁起絵巻が既成の諸本に則ることに対し、段落構成、図様ともきわめて創造的な部分が多く、清新なエネルギーに満ちている。

それは制作依頼者や絵師の力だけではなく、室町時代以降における天神縁起の新しい展開にも歩調をあわせるものであり、これらの点から、本作品の持つ意義は大きい。

本号では全絵部の図版と段落構成とをまず紹介することとする。

はじめに
一、神博本の構成
二、神博本の特徴
（a）段落構成について
（b）詞章について
（c）図様について
三、神博本の絵師とその画風
付：詞書翻刻

はじめに

ここに紹介する天神縁起絵巻は、近年新出したもので、全六巻、四十四段からなり、欠失部のない完本である。

奥書や外題、その他の付属資料もないため、伝来や制作背景については不詳である。内容も特定の天神社に触れることはなされていないが、いずれかの社に伝わったものであろう。系統としては、甲本系の北野天神縁起に属し、巻頭の詞章も甲本系の特徴である「王城鎮守神々おほく…」で始まる。

作られた時代は室町後期、十六世紀半ばに下り、中世の天縁起絵巻の掉尾を飾るものといえる。そして本作品の最も注目すべき点は、それが当時の中央画壇で主導的立場を担った狩野派によって作られたということにつきる。

ここに見られるきわめて創造的な態度は、漢画壇から発した同派

が、伝統的な絵巻制作の分野に新たに踏み込んで行く旺盛なまでのエネルギーに満ちており、これまでに類例をみない新図様ともあいまって、数ある天神縁起諸本中の奇観といっても過言ではないと思う。

その簡単な紹介は、角川『絵巻物総覧』にのせておいたが、小論ではその詳細について考察を行いたい。ただし、紙数の関係上、本号では全絵部のモノクロ図版を掲載し、言及するのは冒頭に掲出した内容の内、一の構成を紹介するにとどめ、以下は次号にまわすことにしたい。なお記述上、当作品が近年、神奈川県立歴史博物館の所蔵になったため、「神博本」と略称する。

一、神博本の構成

前記したように、詞書の内容は甲本系に順ずるものの、構成、図様等はかなりの異同が見られる。甲本類に則った理由についてはなんらかの積極的なものがあったはずだが、今となっては詳らかにできない。もっとも時代的に見た場合、甲本類に属する作品は、現存天神絵巻中、最古の承久本をはじめとして、諸家分蔵本北野本地絵、メトロポリタン美術館本、旧荏柄天神社本など鎌倉期の作例を経て、南北朝から室町後期にかけても諸本が陸続と制作されていることを見れば、この時代、神博本がこれにならったとしても不思議ではあるまい。

いったい甲本類自体からして、構成一つとっても各々まちまちで、詞書・図様とも各本異同があり、かなり複雑な転写関係が従来から指摘されている。そのため諸本の継承過程や影響関係を把握することはきわめて困難な系統である。

それを反映するかのように、神博本の構成、詞書内容、図様など、どれをとっても、直接の祖本を想定することは難しく、また甲本系の大きな流れの中のどこに位置付けるかも難しい。

その段落構成、図様は以下の通りである。

第一巻

第一段　道真化現

承和十二年（八四五）、菅原是善（八八二―八八〇）の元に、幼児の姿に化現して道真が現れるところ。絵は2場面に分かれ、一つは邸外での出会い、一つは邸内で、父子の契りを結ぶ二人の語らいを描く。

2場面に分かつのは甲本系に多いが、とくに二人ともども邸外で出会う描写は大生郷本などに見られるのみで希なものである。

第二段　年少詩作

嘉祥三年（八五〇）、是善、道真十一歳の詩作の秀抜さに感嘆する。

図様の大要は諸本と同工ながら、背後の屏風は総金地（金泥彩）の花木図で制作時（室町期）の趣向を反映する。

第三段　大戒論序

文章生となった道真が、貞観八年（八六六）、依頼者の安恵和尚の前で、「顕揚大戒論序」を執筆する。

図様の大要は諸本と同工ながら、背後の襖絵は金泥をうっすらとはいた水墨の蘆雁図で、狩野派の描法を示すとともに、制作時代の趣向を反映したものである。

第四段　良香邸弓遊

貞観十二年、良香邸で弓術を試される道真。

図様の大要は諸本と同工のもの。

第五段　吉祥院五十賀

寛平六年（八九四）、道真、吉祥院で五十の祝いをする。

絵は画面中央に坐り振り返る道真に、願文と砂金を献じる老人姿の陽成院を中心に描かれる。横長の法会場面は甲本系によく見られるもの。

第六段　一事中十首詩作

詞書は寛平七年（八九五）の「一事中十首詩作」と寛平九年の「任大納言大将」を述べる。

その絵としては「任大納言大将」を描くものが圧倒的に多い中にあって、神博本は対面する道真と一人の官人を描く希なものである。いずれの内容とも明確に判じ得ないが、平群天神社本にはこれとほぼ同じ図様（道真は傍らに硯を置くが）で「一事中十首詩作」が描かれるため、ひとまずは十首詩作の令旨を受ける道真とみなしておく。

第七段　家集天覧

詞書は昌泰二年（八九九）の「任右大臣」と同三年の菅原家三代にわたる歌集を天覧に付す「歌集天覧」とを述べる。

その絵としては「任右大臣」を描くものが圧倒的に多い中にあって、神博本は絵は中央に歌集天覧に立ち会う道真を描くという、極めて珍しいものである。

第八段　朱雀院行幸政務委任

昌泰三年（九〇〇）、朱雀院に行幸した延喜帝と寛平法皇の密議によって、道真一人に政務委任が決定される。

絵は2場面にわたり、一つは帝と法皇の密談場面、一つは道真に政務が委任される場面が描かれる。この2場面が描かれるのは室町期の作例から多く見られるが、神博本も例外ではない。襖一つ隔てて、時空が隔たれ、場面が展開する。

第二巻

第一段　時平讒言

道真政務委任を聞き、左大臣の藤原時平が道真を讒言するにいたる。詞書はそれ以外に、陰陽寮の官人を使い呪詛を行ったことに触れる。

絵は2場面に別れ、時平らが官人に珍宝を渡し呪詛を依頼する場面と、人形を立てていよいよ呪詛を行う場面が描かれる。

この場面を描くものは上宮天満宮本などわずかにすぎない。時平の背景の襖には金泥引きの水墨山水画が見える。

第二段　奏上法皇

詞は、道真の太宰府流罪の宣旨が下ったことを聞いた法皇が、驚いて内裏に向かうが、菅根朝臣に押しとどめられるという、いわゆる「椋木法皇」と同文のもの。諸本の絵は通例、椋木の下で阻止され悲嘆する法皇を描くが、神博本は邸内で法皇に官人が対面する描写であり、これもきわめて珍しい。ひとまずは道真流罪を法皇が奏上される描写と考えておきたい。となれば椋木という題名もふさわしくなく、便宜、「奏上法皇」とした。

第三段　紅梅殿別離

離散する道真一族が、紅梅殿に別れをつげる場面。片膝を組む、道真の傍らの童子がいたいけである。

この横長の図様の大要は諸本と同工のものである。

第四段　西下陸路

太宰府に向かい陸路を牛車でゆく道真。

この横長図様の大要は諸本と同工のものである。

第五段　西下海路

舟に乗り換え、西下する一行。中央で嘆き悲しむ白髪の老人が道真。

この船出の描写の大要は諸本と同工のものである。

第六段　恩賜御衣

詞は太宰府の道真が、延喜三年（九〇三）、宮中にて行われた重陽の宴の時に、御衣を恩賜されたことを思いだし、御衣を取り出し嘆く場面である。

絵は通例、道真の傍らに御衣が描かれる場合が多いが、神博本は御衣はなく、硯箱と白紙の紙が置いてあるという希な図様である。詞書には続けて、道真がこの時、白居易の詩になぞらえて詩作したことを述べるため、これにあたる場面とみなしておきたい。

第七段　送後集長谷雄

道真が太宰府で詠みためた歌を後集と称し、都の紀長谷雄に送る。

図様の大要は諸本と同工であり、送られた文箱を傍らに道真の心情を思い涙にくれる長谷雄を描く。

第八段　天拝山

道真が天拝山に登り、無実を訴え、天満大自在天になるもの。神博本はとくに白髪の道真を描くところに新味を出している。

第三巻

第一段　薨去安楽寺墓所

延喜三年（九〇三）、薨去した道真の遺骸を運ぶ途中に、後に安楽寺となる場所で牛車が動かなくなったので、そこを墓所とする。

絵の大要は諸本と同工のものである。

第二段　榴榴天神

延暦寺座主の尊意のもとに現れた天神、帝に怨みを述べることをとどめられ、妻戸に榴榴を吐き、燃え上がらせる。

通例、絵は天神が妻戸を叩き、対座しながら柘榴を吐き出すといった2場面構成が多いが、神博本は妻戸を叩き、対座し、石榴をはきだすという3場面からなる。しかも襖の表裏で画面展開を行うことは、他段にもみられるこの絵師の常套表現である。

第三段　清涼殿霹靂時平抜刀

清涼殿に天神が雷神となって落雷。時平、刀を抜き立ち向かう。

絵の大要は諸本と同工のものだが、時平が毅然として立ち、落雷時の恐怖感にもやや欠けるうらみがある。

第四段　尊意鴨川渡水

天神慰撫の宣旨を受け、内裏に向かう尊意が、洪水の鴨川を渡る際、水がそこだけ陸地となる。

絵の大要は諸本と同工のものである。

第五段　時平薨去

延喜九年（九〇九）、時平は重病におちいり、加持祈祷を依頼された浄蔵は、その父善相と時平を見舞うが、時平の耳から蛇が出て善相に調伏をやめるようにいったため、浄蔵はあきらめ、時平はほどなく絶命する。

神博本は2場面に分かれ、ひとつは耳から蛇を出す時平に加持を行う浄蔵とこれに立ち会う善相だが、画面左方向に向かって時平が描かれることは諸本と異なる。これは次の場面に諦めて退出する浄蔵と善相を描くことにもあったと思われるが、この退出場面まで描くものも希である。また時平の背景の屏風は、金泥引きの行体の水墨山水図で、いかにも狩野派風のもの。

第六段　公忠蘇生奏上

延喜二十三年（九二三）、地獄へ堕ちた藤原公忠が天神にあい、醍醐帝を誹るのを聞き、蘇生して延喜帝に奏上する。

絵の大要は諸本と同工のものである。

第七段　菅公清涼殿化現

天神、清涼殿に現れて帝に怨みを述べる。

神博本の絵は、帝の前に紫雲に乗り現れる天神であるが、この絵を描くことも室町期以降の諸本に見られるものである。

第八段　清涼殿落雷

延長八年（九三〇）天神が祟りをなし清涼殿に落雷。

絵の大要は諸本と同工のものである。

第九段　延喜帝落飾崩御

同年、延喜帝譲位、出家するも、ほどなく崩御する。

神博本は落飾の図様は諸本と同工だが、襖を隔て、左の部屋に公卿たちが雑談する様子まで描くのはは希である。

第四巻

第一段　日蔵上人巡歴1

承平四年（九三四）、金峯山の笙岩屋で修行する日蔵上人が、突然にみまかり、蔵王菩薩の導きで、三界六道を巡る。甲本系は地獄の描写が特に詳細であるのだが、以下の3段は神博本が最も生彩を放つ部分である。

ほとんどの諸本は岩屋で修行中、みまかう日蔵、蔵王菩薩に持ちいだかれて空中を飛び、地獄で火炎にまみれ苦しむ延喜帝に会うという3場面を続けて描くことが多いが、神博本は岩屋で修行しみまかった後に空中を飛び、まず一番に太政威徳天城で眷属たちに囲まれた天神に謁見する図と地獄で閻魔王に会う図、さらに男女仲睦まじく暮らす兜卒天の3図をつけ加えて、もって一段とする。

とくに天神の背屏は総金地に松と梅をあしらったもの、天神の容貌、姿態は初期狩野派の単幅の天神像などに瓜二つのものがある。

また新加された兜卒天図なども、神博本のみの特筆すべき図様といってもよい。いずれも異国風（中国風）に描かれ日蔵の前に二組の男女、その彼方の楼閣の中に、鎮座する弥勒菩薩を描く。

第二段　日蔵上人巡歴2（鉄窟苦所）

地獄の鉄窟苦所で火にまかれて苦しむ延喜帝ほか三人の亡者を見る場面。

図様の大要は諸本と同工である。

第三段　日蔵上人巡歴3（阿修羅道）

六道の内、阿修羅道を描く。図は雲中、帝釈天が阿修羅の一群を追う図であり、他本には全く見られない、神博本の白眉とも言える部分の一つである。

第四段　日蔵奏上事

日蔵上人、蘇生し、延喜天皇や天神のことなどを朱雀帝に奏上。

図は津田天神社本などに近いが、とりたてて新味のあるものではない。

第五段　朱雀帝法華経供養

日蔵の教えにより、朱雀帝は一日の内に法華経千部を書き写し宇治の宝蔵へ収めるなどの善行を積む。

神博本は2図に分かれ、一図は僧侶たちによる法華経書写の場面、次の1図には経典奉納の際の舞楽供養の様子を描く。

法華経供養はスペンサー本などにも描かれるが、類例は希である。

第五巻

第一段　綾子託宣

天慶五年（九四二）、多治比の女綾子に天神の託宣が下り、

一祠を創始する。

図は諸本とも2図に分け、一つが屋内で託宣を受ける綾子を、一つは一祀を奉幣する綾子を描く。神博本もこれに則り、図様もほぼ同工である。

第二段　太郎丸託宣

天慶九年（九四六）、近江比良宮の弥宣良種の子、太郎丸に天神の託宣が下る。

神博本は、驚く人々の前で空を仰ぐ太郎丸を描く。図様は左に鳥居を描くところなども含め、諸本と同工のものである。

第三段　右近馬場相議社殿建立・九条殿信心事

良種、託宣により右近馬場に駆けつけ、朝日寺最鎮と相議、一夜の内に松が生い林になったため社殿を建立する。

また天徳三年（九五九）、九条右大臣師輔が社殿を建立する。

神博本の図様は2場面に分かれる。ひとつは林の中で奇瑞に驚く良種、太郎丸、最鎮ら。図様の大要は諸本と同工である。

今ひとつは板敷きの上の上畳に端座し、北野社の普請を見守る師輔。これも極めて希な図様である。師輔の背後の屏風には総金地に梅と竹が大きく描かれている。

第四段　北野宮繁盛

前段を受けて諸本には希な北野社の繁栄の様子を語る。

絵は北野社に参詣する人々。社殿廊下で赤子に乳をふくませる図様は狩野派がよく用いるものである。

第五段　内裏炎上

天徳四年（九六〇）九月に一僧の夢に北野社の上空に黒雲がわきたち、これが内裏にいたって落雷するのを見る。二十三日には、これが正夢となり、天神の眷属の所業で内裏が炎上する。この時、内侍所の鏡が紫宸殿の桜の木に掛かり、光を放つ。これを見た人は皆、悶絶するので、これを小野宮左大臣が祈念慰撫した。

この話を取り上げること自体、希なもので、自ずと図様も清新なもの。炎上する内裏で火消しや、女房を担ぎ出す白丁など大わらわの人々、その左には鏡を配する小野宮左大臣の姿を描く。

第六段　内裏造営虫喰和歌

円融院の代には、三度内裏が炎上するが、その造営の折、紫宸殿の裏板に、虫食いによって書かれた不思議な和歌が発見される。

図はそれをのぞき込む公卿や番匠たち。通例は普請仕事の傍らに、虫食い板をのぞき込む様子が描かれるが、神博本のように普請仕事を描かないのは希である。

第七段　官位追贈

正暦四年（九九三）、道真に左大臣を追贈、さらに翌年、太政大臣の官位が贈られる。

図は北野社前で太政大臣の官位追贈が執り行われるもの。そ

の図の大要は諸本と同工のものである。

第六巻

第一段　待賢門院女房

盗みの嫌疑を受けた待賢門院の女房、北野社に参籠祈願するや、真犯人の女房敷島が盗衣をもって現れる。

通例は右に北野社前で女房の祈願の図、左には宮中内に現れた敷島を連続して描くが、神博本は1図ずつを霞で区切って2図に描く。1図目は社の向きが多くの諸本と異なり、左に置き換えられるが、これは神博本が北野社の描写を、常に左側に置き、正面を右に向ける構図をとるからに他ならない。2図目の大要は諸本と同工のものである。

第二段　世尊寺阿闍梨仁俊

鳥羽院の女房に女犯の讒言をされた仁俊、北野社に訴えたところ、当の女房が狂い出す。仁俊が加持を行ったところ、正気にもどったため、仁俊にはうすずみという馬が下賜される。

図の大要は通例のもので、仁俊が狂い踊る女房に加持する場面と、馬を下賜される場面。

第三段　仁和寺阿闍梨事

北野社の旅所の前を、牛車で通り過ぎようとし仁和寺阿闍梨に、天神の神罰が下り、牛が頓死する。

図の大要は通例のもの。

第四段　仁和寺西念

延久二年（一〇七〇）、往生を願う西念、北野社に参籠し、天神の託宣によって、無事に往生がかなう。

神博本は三場面2図に分かれる。1図目は、師匠の僧に往生の日を問う西念、連続して右に移るようだが、建物は変わり場面も変わる。次は不確かだが、目をこするところから、北野社で夢まどろむ内に天神の託宣を受けて退出する場面と判ぜられる。次の1図は西念が往生する場面。図様は神博本独自の諸本には希なるもの。西念の往生する背後の蘆雁図は金泥引きの水墨画で、これも狩野派の描法がよく出ている。

第五段　銅細工娘・銅細工娘北野参籠

承保二年（一〇七四）、貧しい銅細工の姉妹が生母の亡き後、継母に虐げられる。北野社に参詣したところ、同じく参籠中の播磨守有忠が憐れみ姉を妻に、妹を宮仕えにさせる。姉妹は天神より孝養を讃える託宣を受ける。

神博本は2図に分かれ、1図は母の死を嘆き悲しむ一家。2図目は北野社で有忠と姉妹が対面するところ。図様は神博本独自のものだが、とくに1図は、諸本が継母に虐げられる姉妹を描くことが多い中にあって希なるものである。

第六段　銅細工娘受福

有忠と姉妹は富栄え、父母への孝養を積み、ついに往生を遂げる。

図は富み栄える有忠一家の宴席の様子で、図様自体は神博本独自のもの。有忠夫妻の背後の屏風は総金地の薄の原、左に続く賄い場なども松崎天神本などにも見えるが、神博本のそれは狩野派描く酒飯論絵巻の図様にも通じるものである。

第七段　八月祭

村上帝よりはじまる八月の御旅所祭礼の盛儀で、他本には画かれることはほとんど希な段。

図は右から左へ御旅所からの御輿の還幸、田楽、獅子舞、舞楽、相撲、王の舞などの奉納が描かれる。神博本の清新な図様の中においても、とくに生彩に富むものの一つである。

以上が神博本の構成である。この段落構成、図様をみるかぎり、いかに神博本が様々な要素を取り入れ、さらに加えて清新な図様を作りだしているかがわかろう。それはまた室町時代以降における天神縁起の新しい展開にも歩調をあわせるものであろう。その斬新さは制作依頼者の意志も強く反映されているのだろうが、またそれにこたえるだけの力量が絵師の方にもあったことは確かである。

その特質等については、次号にゆずることとしたい。